

関東地方における弥生時代 農耕集落の形成過程

Process of the Formation of Farming Settlements
in the Yayoi Period in the Kanto Region

設楽博己

はじめに

- ① 弥生再葬墓造営集団をめぐって
- ② 小規模移動性集落の出自と性格
- ③ 再葬墓造営集団の生業形態
- ④ 関東地方における本格的農耕集落の形成過程
- ⑤ 関東地方における本格的農耕集落形成の特質
- ⑥ 結論

【論文要旨】

神奈川県小田原市中里遺跡は弥生中期中葉における、西日本の様相を強くもつ関東地方最初期の大型農耕集落である。近畿地方系の土器や、独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物などが西日本的要素を代表する。一方、伝統的な要素も諸所に認められる。中里遺跡の住居跡はいくつかの群に分かれ、そのなかには環状をなすものがある。また再葬の蔵骨器である土偶形容器を有している。それ以前に台地縁辺に散在していた集落が消滅した後、平野に忽然と出現したのも、この遺跡の特徴である。

中里集落出現以前、すなわち弥生前期から中期前葉の関東地方における初期農耕集落は、小規模ながらも縄文集落の伝統を引いた環状集落が認められる。これらは、縄文晩期に気候寒冷化などの影響から集落が小規模分散化していった延長線上にある。土偶形容器を伴う場合のある再葬墓は、この地域の初期農耕集落に特徴的な墓であった。

中里集落に初期農耕集落に特有の文化要素が引き継がれていることからすると、中里集落は初期農耕集落のいくつか、灌漑農耕という大規模な共同作業をおこなうために結集した集落である可能性がきわめて高い。環状をなす住居群は、その一つ一つが周辺に散在していた小集落だったのだろう。結集の原点である大型建物に再葬墓に通じる祖先祭祀の役割を推測する説があるが、その蓋然性も高い。水田稲作という技術的な関与はもちろんのこと、それを遂行するための集団編成のありかたや、それに伴う集落設計などに近畿系集団の関与がうかがえるが、在来小集団の共生が円滑に進んだ背景には、中里集落出現以前、あるいは縄文時代にさかのぼる血縁関係を基軸とした居住原理の継承が想定できる。

関東地方の本格的な農耕集落の形成は、このように西日本からの技術の関与と同時に、在来の同族小集団－単位集団－が結集した結果達成された。同族小集団の集合によって規模の大きな農耕集落が編成されているが、それは大阪湾岸の弥生集落あるいは東北地方北部の初期農耕集落など、各地で捉えることができる現象である。

はじめに

これまでに南東北・関東地方を中心として弥生再葬墓⁽¹⁾は数多く見つかっているが、居住域が不明確であった。その状況は弥生再葬墓の造営集団に対する理解を著しく困難にしており、この地域における初期農耕文化の形成を研究するうえで大きな支障となっている。しかし、実生活の場所がどこかにあったのは当然なので、それをどのようにして見つけ出すかが問われよう。

この難題に対しては、弥生再葬墓の性格を背景として演繹的に居住域と墓地の関係をモデル化することにより生活跡を考えていく方法と、近年少ないながらも事例が増加してきた生活跡を調査・分析することによって、その実態を具体的に明らかにしていく二正面作戦で、新たな展望が切り開かれつつある。

もう一つ、この地域の弥生文化研究においては、どのようにして本格的な農耕集落が形成されていくのかという課題がある。この問題の解明は弥生再葬墓造営集団が、どのように本格的農耕集団へと変貌を遂げていったのか、という歴史的な展開過程を明らかにすることでもある。この点については、近年神奈川県小田原市中里遺跡を始めとする本格的な農耕集落の様相が各地で捉えられるようになってきており、それに対する論考も目立つようになって、学ぶところは大きい。

筆者もその驥尾に付して小論を発表した [設楽 2004a]。本稿は、その補足や補訂をかねて、関東地方における弥生時代農耕集落の形成や展開過程の解明に対して、既往の研究を評価しつつ、縄文時代における集団関係の展開を踏まえて再葬墓造営集団の性格を明らかにしていく、という別の角度からそれに取り組んだものである。

なお、本稿では弥生再葬墓が展開する東海地方から南東北地方の福島県までを中部日本と呼称する。地理学的にそうした名称はないかもしれないが、東日本初期農耕文化を考えるうえでは、縄文晩期終末の浮線文土器の分布範囲であると同時に、初期弥生文化の条痕文系土器と弥生再葬墓の分布範囲という、歴史的に形成された重要な地理上のまとまりである。記述の便宜上、固有の名称を与えておくことにした。

①……………弥生再葬墓造営集団をめぐって

第1節 弥生再葬墓造営集団の探索

中部日本の弥生時代前半には再葬墓が盛んに造営された。その遺跡の数はおよそ100を下らない。それを造営した集団が少なくともその数だけはあったはずであるから、その人々の居住域も当然存在していたのに、不明瞭である。数ばかりでない。福島県霊山町根古屋遺跡の弥生再葬墓のように、100個体近い蔵骨器を用いて100人以上の人々を再葬した墓が検出されており、その墓域は弧状をなし、その中がいくつかの群に分かれていた [梅宮ほか 1986]。墓域は巨大なのに、それを造営した人々はどこに居住していたのかわからないというのは、なんとも不思議なことである。

この疑問に対する解答はいくつか考えられようが、石川日出志の指摘は示唆的である。石川は、

弥生再葬墓を築いた人々の通常時の集団規模は極めて小規模であったと考える。それは、祖先を同じくする集団がいくつにもわかれて住んでいたことを示しており、死者が出た時に共通の墓地に葬り、ある時点で共同で再葬をおこなった結果として、再葬墓数と居住域の数のアンバランスを説明する [石川 1999 : 175 頁]。すなわち、弥生再葬には祖先祭祀の意味合いが強く、再葬墓は分散化した複数の小集落によって営まれた共同墓地と考え、先の疑問は氷解するのである。

それにしても集落の数が圧倒的に少ないが、これは居住の痕跡もあまり残らないような移動性の高い居住形態をとっていたことが、可能性として考えられる。

石川は上述のモデルを検証するべく、新潟県域の弥生再葬墓を中心とした地域に焦点をしぼり、散在する小集落の調査をおこなって、弥生再葬墓と居住集団との関係を把握する手がかりを得ている [石川 2000b, 2005]。また近年、安中市域を中心とした群馬県域西部で弥生前・中期の集落が発見され、調査が進んでいる。小林青樹・大工原豊・井上慎也は、この地域に的をしぼり、弥生時代初期集落を調査、分析し、その居住形態と弥生再葬墓との関係についてまとめた。その結果、台地上の集落は小規模散在的で弥生再葬墓も希薄であることから、弥生再葬墓に共同墓地としての性格を想定する石川の説を支持している。さらに、集落の小規模短期的性格には、焼畑など畠作依存型の生業への傾斜がうかがえると考えている [小林ほか 2003 : 47 頁, 小林 2004 : 14 頁]。つまり、小規模短期的移動型集落と、畠作、そして弥生再葬墓とはいわば三位一体の関係性をもっていたというのである。

群馬県域西部で、再葬墓が造営される弥生前中期から中期前葉 (表 1) までの分析対象集落のうち、竪穴住居跡が発見されたのは、安中市注連引原Ⅱ遺跡第 1 地点で弥生Ⅰ期末の 2 棟、竪穴住居ないし平地式建物 1 棟 [大工原ほか 1988]、同第 2 地点でⅠ期の 2 棟 [井上ほか 2003]、同市大上遺跡でⅡ～Ⅲ期前半の 4 棟 [井上ほか 2003]、同市中野谷原遺跡でⅡ～Ⅲ期前半の 15 棟 [井上ほか 2004]、吉井町神保植松遺跡でⅡ期の 3 棟 [谷藤ほか 1997] である [小林ほか 2003 : 45～46 頁]。小林らが明らかにした内容をもとに竪穴住居の変遷と性格をまとめたうえで、掘立柱建物や土坑を加えて居住形態を分析していくことにしよう。

表 1 近畿地方以東の縄文晩期～弥生中期の土器編年

	近 畿	東海西部	中部高地	関 東 北関東 西南関東	東 北 福島・仙台平野・北東北	北 海 道	
縄文晩期前半	滋賀里Ⅱ 滋賀里Ⅲa 篠原 (古) 篠原 (中) 篠原 (新)	寺 津 元刈谷 稲荷山	+	安行 3a 天神原 安行 3b 安行 3c	大洞 B ₁ 大洞 B ₂ 大洞 B-C1 大洞 B-C2 大洞 C ₁	館浦・東三川Ⅰ 札刈 B 上ノ国 (日吉町 1)・(社台 1)・内藤	縄文晩期前半
縄文晩期後半	滋賀里Ⅳ 口酒井 船 橋	(西之山) 馬見塚 F 五貫森 馬見塚	佐野Ⅱa 佐野Ⅱb 女鳥羽川 雑 山 氷Ⅰ(古) 氷Ⅰ(中)～(新)	安行 3d 前窪 千網 桂台	大洞 C ₂ (古) 大洞 C ₂ (新) 大洞 A ₁ 大洞 A ₂ 大洞 A'	美々3～スサマイ・聖山 タンネットウシ・緑ヶ岡 湯の里 6・氷川	縄文晩期後半
弥生前期	Ⅰ(古)・長原 Ⅰ(中) Ⅰ(新)	遠賀川・櫻王 水神平	氷Ⅱ	沖 堂山	御代田 青木畑 砂沢	弥生前期 砂沢・栄浦	
弥生中期	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	朝日・岩滑 貝田町 高 蔵	庄ノ畑 寺 所 阿 島 栗 林	(岩櫃山) 神保富士塚(遊ヶ崎) 池 上 北 島	今和泉 原 二枚橋 龍門寺 高田 B 南御山 2 中在家南 川原町口	二枚橋・興津 字鉄Ⅱ 田舎館 念仏間 弥生中期 恵山 宇津内Ⅱa 後北 B・宇津内Ⅱb	縄文前期

第2節 台地上の小集落—群馬県域西部の事例を中心に—

堅穴住居をめぐって 群馬県域西部は長野県域との境の山岳地帯の東縁にあたり、河川の氾濫原と山塊から続く台地の地形から構成されている。群馬県域西部における縄文晩期終末～弥生中期前葉の集落はおもに台地上に展開するが、堅穴住居はいずれも方形ないし長方形をなし、2～3mほどの小型で不整形の例が多く、掘り込みが浅かったり、掘り込みすらよくわからない住居も多い(表2)。

表2 群馬県域西部を中心とした弥生時代前期～中期前半の堅穴住居跡

遺跡	住居	形態	大きさ	深さ	炉	主柱穴	時期	備考	文献
群馬県安中市注連引原遺跡	Y-1号住居跡	長方形	6-7×5-6m	浅い	地床炉(置石)	6本台形+4本	I期		大工原ほか1987
群馬県安中市注連引原II遺跡 第1地点	Y-1号住居跡	不正隅丸方形	3.5m	20cm	地床炉(置石)	不明	I期		大工原ほか1988
	Y-2号住居跡	不明	不明	不明	不明	不明	I期	一部発掘、住居か不明	井上ほか2003
	Y-3号住居跡	方形	3.2m	6cm	不明瞭(炭散布)	不規則(浅い)	I期	平地式か	//
長野県塩尻市五輪堂遺跡	第2号住居址	楕円形	4.6×3.0m	10-17cm	掘込炉	壁外に不規則	I～II期初頭	周溝あり	鳥羽ほか1989
	第3号住居址	隅丸方形	3.6×3.2m	17-41cm	地床炉	壁外に規則的に10本	I～II期初頭	周溝あり	//
	第7号住居址	隅丸方形	3.8×3.4m	8-54cm	なし	なし	I～II期初頭	住居跡か不明	//
	第8号住居址	隅丸方形	4.1×3.7m	8-15cm	掘込炉	不規則	I～II期初頭		//
	第10号住居址	隅丸方形	4.0×3.6m	21-57cm	なし	なし	I～II期初頭		//
	第11号住居址	隅丸方形	4.8×4.4m	15-24cm	石囲炉	4本	I～II期初頭	周溝あり	//
	第12号住居址	隅丸方形	(3.4×3.2m)	3～9cm	石囲炉	なし	I～II期初頭		//
群馬県安中市中野谷原遺跡	Y-2A号住居址	円形?	直径4m	10cm	なし	不規則(浅い)	II～III期前半		井上ほか2003
	Y-2B号住居址	円形?	直径6.2m	10cm	地床炉	不規則	II～III期前半		//
	Y-3号住居址	円形?	直径5.4m	0cm	石囲炉	4本	II～III期前半		//
	Y-4号住居址	楕円形	6m×5.4m	10cm	なし	6本(不規則)	II～III期前半		//
	Y-6号住居址	楕円形	7.2×5.9m	10cm	石囲炉	4本(不規則)	II～III期前半		//
	Y-7号住居址	円形?	直径4.2m	10cm	地床炉	4本+1本(不規則)	II～III期前半		//
	Y-8号住居址	楕円形	2.8×2.2m	10cm	なし	住居外に環状小ピット	II～III期前半	住居か不明	//
	Y-9号住居址	楕円形	5.2×4m	10cm	なし	不規則(浅い)	II～III期前半		//
	Y-10号住居址	円形?	直径4m	20cm	地床炉	4本	II～III期前半		//
	Y-11号住居址	円形?	直径4m	10cm	地床炉	不規則(浅い)	II～III期前半		//
	Y-12A号住居址	円形?	直径6.2m	0cm	石囲炉	環状	II～III期前半		//
	Y-12B号住居址	円形?	直径6.2m	0cm	地床炉	環状	II～III期前半		//
	Y-14号住居址	円形?	直径5.2m	10cm	地床炉	4本(不規則)	II～III期前半		//
	Y-15号住居址	長方形?	5m×(4.0m)	10cm	地床炉(置石)	4本(不規則浅い)	II～III期前半		//
	Y-18号住居址	不明	不明	0cm	地床炉(置石)	不規則(浅い)	II～III期前半		//
群馬県安中市大上遺跡	Y-1号住居跡	隅丸長方形	5m×3.2m	8cm	地床炉	不規則	中期		井上ほか2003
	Y-2号住居跡	隅丸正方形	4m	7cm	地床炉(置石)	不規則(浅い)	II期		//
	Y-3号住居跡	不明	不明	平地式	地床炉	不規則	II期	2棟以上	//
	Y-4号住居跡	長方形	3m×(2.6m)	15cm	地床炉	不規則	II期	半分発掘	//
群馬県吉井町神保権松遺跡	51号住居跡	隅丸長方形	4.2m	30cm	地床炉	4本と思われる	II～III期前半	半分残存	谷藤ほか1997
	65号住居跡	正方形	4.2×4.1m	4cm	不明	不明	II～III期前半		//
	67号住居跡	不明	不明	不明	地床炉	不明	II～III期前半	炉跡のみ残存	//

中野谷原遺跡の堅穴住居(図1)の多くは輪郭が楕円形ないし不整円形に復元されているが、輪郭が比較的はつきり捉えられたY-11号や一部分に壁が残っているY-13号からすると、方形に近いと考えたほうがよいかもしれない。炉の存在によって住居だと判断される場合も多く、炉は地床炉で石を一つ置いた置石炉は普及しているが、石囲炉は少ない。また、注連引原II遺跡第2地点Y-3号住居跡(図2)のように、焼土が散っているだけのあまり使用期間が長くないような炉もある。主柱穴は炉をはさんだ不整形の四本柱が基本をなすようだが、不明瞭な例の方が多い。

このように、この時期の堅穴住居構造と出土遺物はいずれも縄文前～晩期前葉のそれに比べて相対的に貧弱であり、短期的な居住を示唆している。小林青樹は掘り込みが浅い堅穴住居を浅床住居

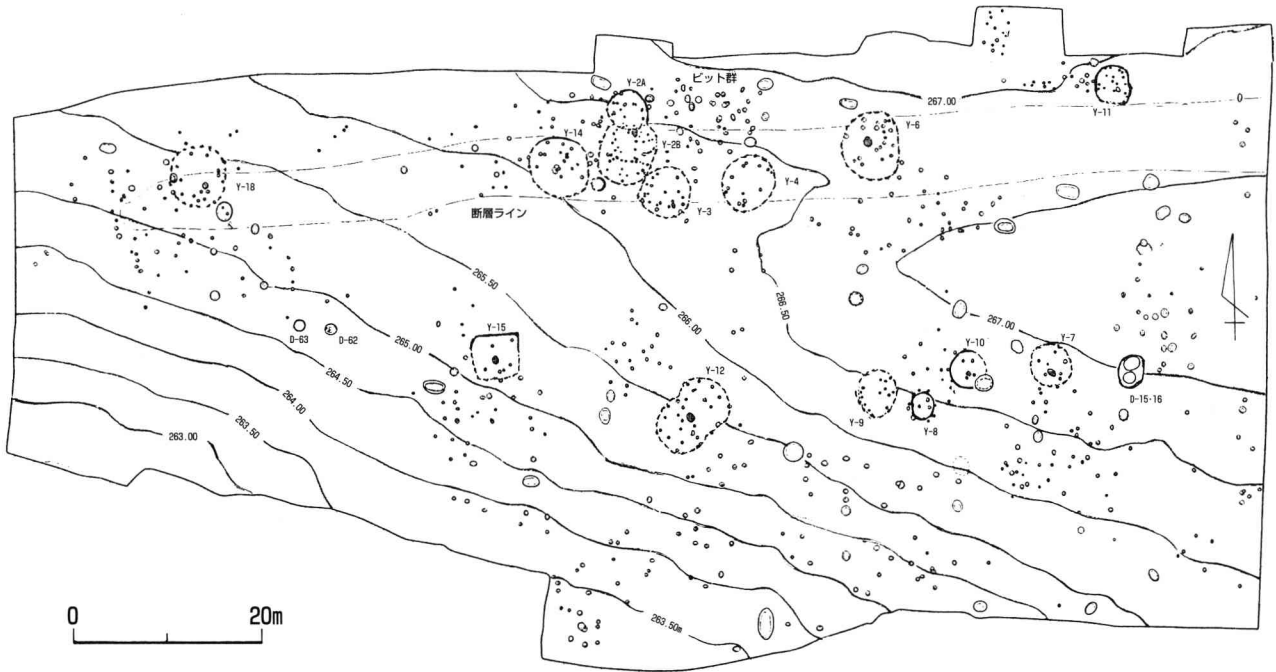


図1 群馬県中野谷原遺跡の集落（弥生Ⅱ～Ⅲ期前半）

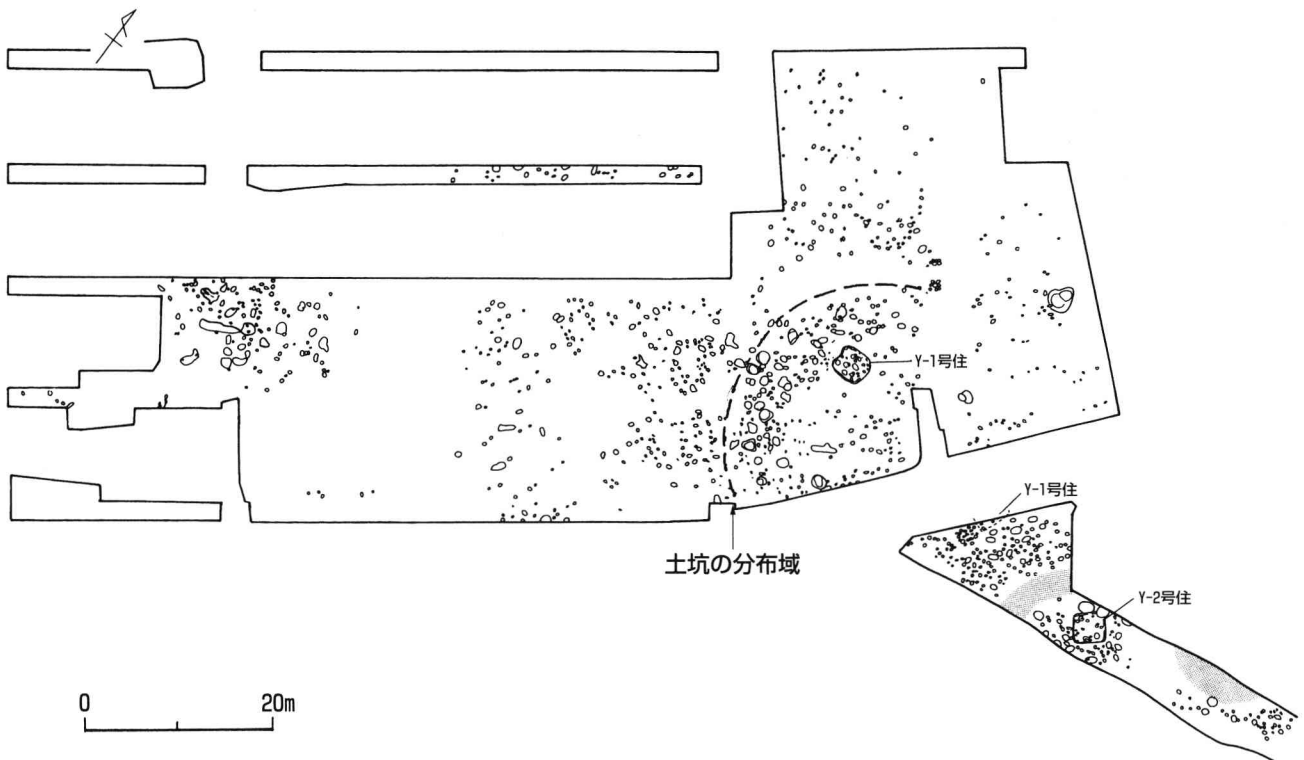


図2 群馬県注連引原遺跡の集落（弥生Ⅰ～Ⅱ期）

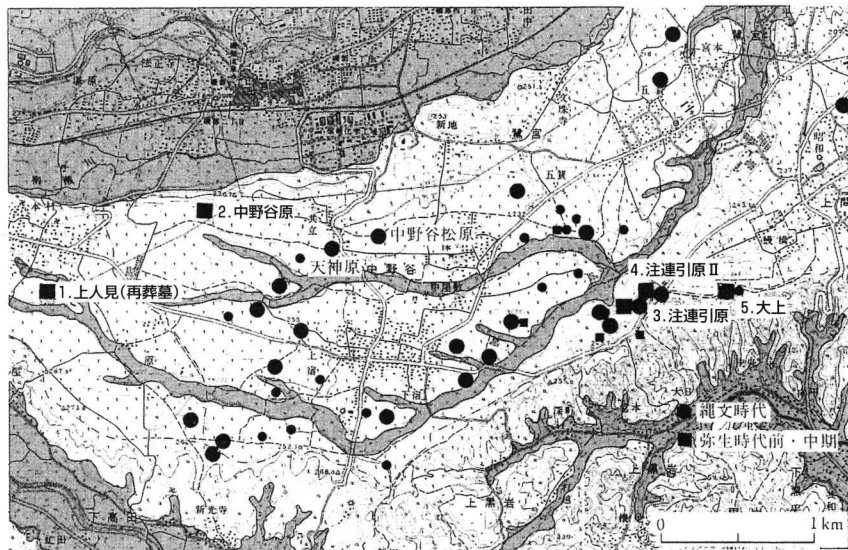


図3 群馬県安中市域と周辺の縄文・弥生時代遺跡分布
(記号の大小は規模を表す。スクリーン・トーンは沖積微高地・低地)

表3 安中市域と周辺の
弥生時代集落動態

	I期古	I期新	II期古
1			
2			
3			
4			
5			

(番号は左図に対応、セルの濃色は主体となる時期)

と呼び、居住期間の縮小に伴い移動性を高めたためと興味深い推測を加えている [小林 2004 : 248 ~ 249 頁]。注連引原遺跡から注連引原 II 遺跡を経て大上遺跡への移り変わりや短期廃絶型の集落の多さ (図3・表3) からうかがえるように、この時期の集落自体、移動性に富んでいたことがこうした簡易的住居の一般化をもたらしたのであろう。竪穴住居の床面の面積は 10 ~ 15m² 程度が多い。これは、縄文時代の小規模竪穴住居と共通した面積であり、基本的には夫婦とその子どもからなる核家族的世帯が居住していたと考えられる。

掘立柱建物の性格 注連引原 II 遺跡では小ピットが多数発見されており (図2)、井上慎也・小林青樹は平地住居を積極的に復元する⁽²⁾ [井上ほか 2003]。それは新潟県新発田市青田遺跡などで検出された縄文晩期終末の平地住居から類推したものだが、新潟県津南町上原 A 遺跡 [津南町教育委員会 2000] で出土したような炉は伴わず、平地住居として復元できるかどうか微妙なところである。それを認めたとしても、柱穴とされるピットの配列は不規則な場合が多く、これらは恒久的な住居とはとても言いがたいのであり、相対的な定住度の低さはやはり揺るがない。

土坑の検討 中野谷原遺跡では、土器が多く出土した土坑が2基連続して2箇所から検出されている (図1)。いずれも平面が円形であり、開口部の直径はおよそ 1 ~ 1.5 m である。D-62・63 は壁がほぼ垂直に立ち上がるが、D-15・16 は袋状である。D-63 から出土した土器は壺、甕、小型壺など多彩である。小型の土器は完形が多いが、大型品は壺1点を除くと破片が多い。これらについては、再葬墓にかかわる遺体処理過程ないし埋葬に用いられた土坑の可能性を考えるむきもあるが [若狭 2001]、貯蔵穴などの土坑とみる説の間で決着がついていない。ほかの遺跡の土坑にも目を通しておこう。

注連引原 II 遺跡 [大工原ほか 1988] は竪穴住居の背後に土坑が 30 基、弧状にめぐる。南部は道路なので、あるいは環状になるかもしれない (図2)。楕円形の土坑 D-1 は、完形の大型壺が横倒しに置かれて再葬墓の可能性があるとされるが、それ以外は不整形のものが多く、土器や石器が破片でわずかに伴うものがほとんどである。直径 1 m ほどの整った円形の土坑が 3 基あるが、それら

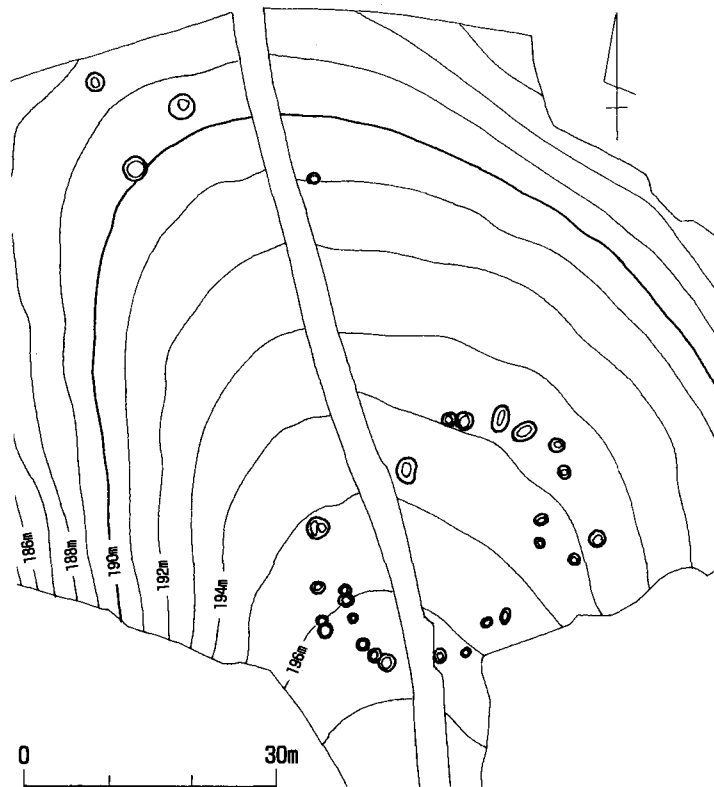


図4 群馬県神保富士塚遺跡の土坑群 (弥生Ⅲ期)

は袋状であり、土器の破片や石器が比較的多く入っている例がある。

群馬県吉井町神保富士塚遺跡 [小野ほか1993] は、鏡川右岸上位段丘上の遺跡である。弥生中期前葉の神保富士塚式土器 [石川2003] の標識遺跡であり、その時期を中心とした土坑が30基発見された。そのうち26基が直径30mほどの範囲に環状にめぐっている (図4)。土坑は円形ないし不整円形が多く、楕円形、長楕円形もある。おおむね径1~1.5mほどで、深さ0.5~1mほどである。なかには整った円形の袋状の土坑や、袋状に近い例がある。整った袋状の土坑の覆土には、甕・

壺・鉢・筒状など多彩な形態の土器破片や石器が多く包含されている。それ以外の土坑も、土器破片や石器を比較的多く含む。遺物は覆土の下層~中層から出土する場合もあるが、おおむね中層~上層に含まれている例の方が多い。多くの土器が破片であり、完全な形の土器が埋設された土坑はない。

神保富士塚遺跡に隣接した神保植松遺跡では、土坑が77基検出されている [谷藤ほか1997]。1号、41号、705号、706号土坑から大型壺を中心とする完形に近い土器が出土しており、弥生再葬墓の可能性が高い。これらの土坑は、袋状をなす例に比べていずれも浅い。土坑は4箇所分布するが、環状をなすような部分も見受けられ、それに竪穴住居が1棟伴いまとまりがよい。中央には弥生再葬墓と考えられる705・706号土坑があり、竪穴住居と土坑からなる居住域と再葬墓の小規模な組み合わせが推定できる (図5)。

他の地域の土坑にも目を通しておこう。神奈川県大井町中屋敷遺跡は台地上のゆるやかな斜面に立地する、弥生前期後葉を中心とした遺跡である [山本・小泉2005]。竪穴住居跡は検出されていないが、土坑が十数基弧状に配置されている (図6)。これらはいずれも直径1~1.5mほどの整った円形で、袋状をなす土坑もある。これらの土坑からは、土器の破片が出土している。22号土坑から、土器の破片に伴って炭化したコメやアワが多量に出土した。とくにコメは18kgの水洗選別用土壌のなかに1000粒に及んでいた。キビやトチの種実もわずかながらまじえている。粘土層が覆土上層に伴う土坑もある。

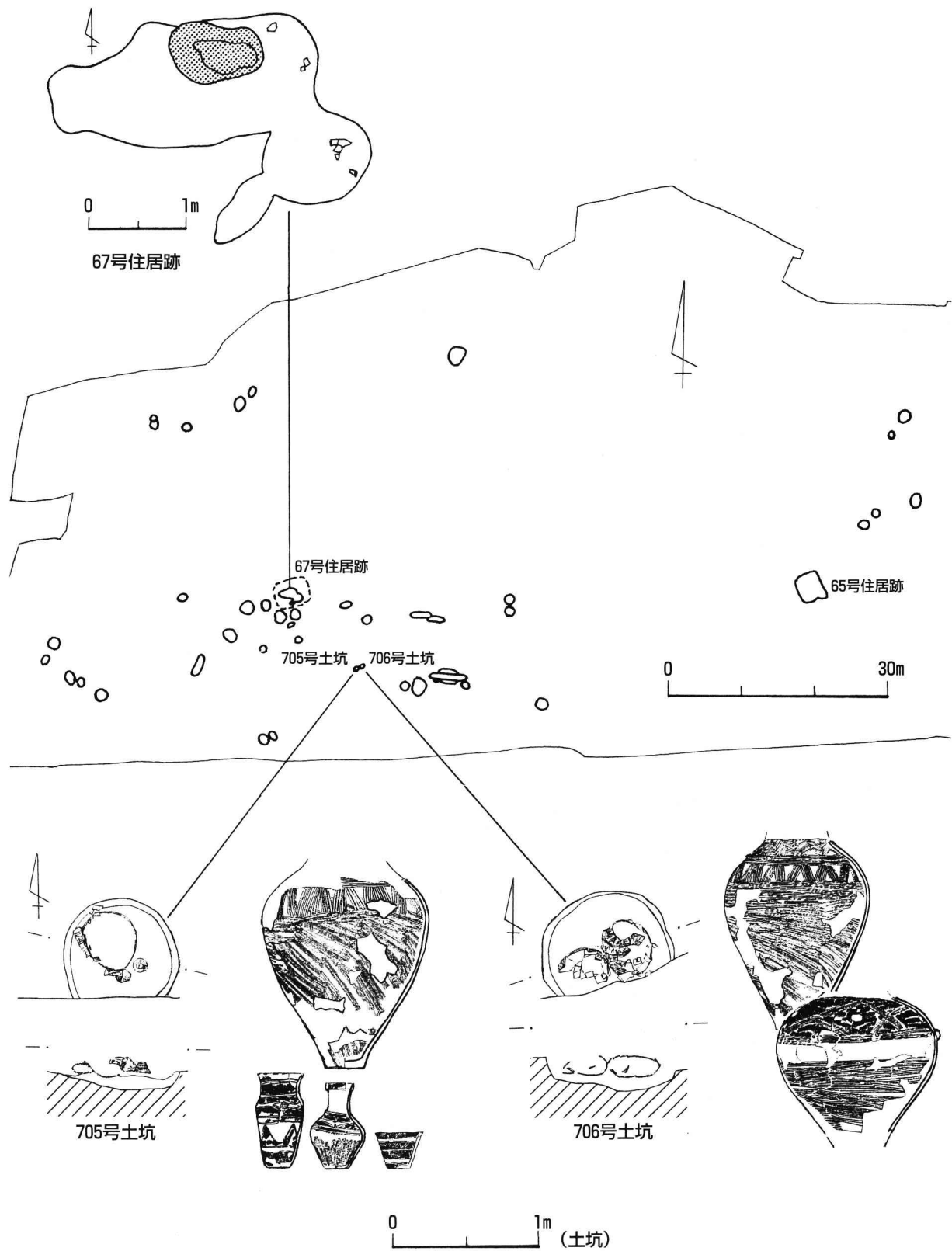


図5 群馬県神保植松遺跡の集落と再葬墓 (弥生Ⅲ期)

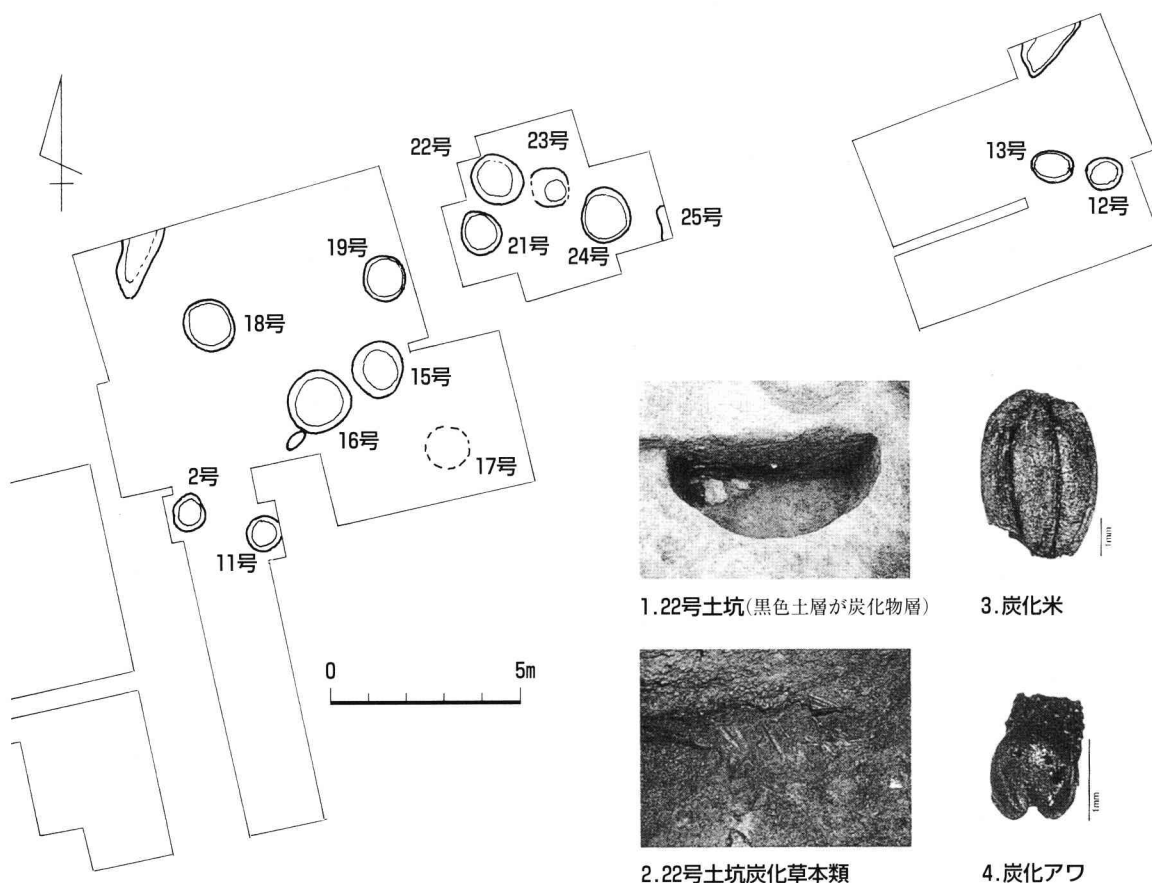


図6 神奈川県中屋敷遺跡の土坑群と出土遺物（弥生I期）

長野県塩尻市五輪堂遺跡は弥生前期の遺跡で、竪穴住居8棟と土坑104基が環状をなしていた(図7)[鳥羽1989]。長野県中川村荻谷原遺跡[中川村教育委員会2001]は、台地末端に立地する弥生前期末、氷Ⅱ式期の集落である。その時期の土坑が6基出土したが、全体の分布状況は明らかではない。土坑は円形ないし楕円形の袋状が多く、きつくオーバーハングするフラスコ形の土坑もある(図8)。土坑からは土器の破片や自然礫が出土し、覆土中層から炭化した種実が検出された土坑もある。土坑の覆土上層に粘土が堆積した土坑があり、同県高森町新田原遺跡から検出された、あたかも蓋をするかのように埋土上面にローム土を盛り上げていた土坑と同じような性格をもつと考えられる。

土坑の機能 このように、この時期の中部高地・関東地方の土坑には、環状や弧状に配置された例が少なくない。問題は土坑の性格、すなわち実生活にかかわるものなのか、墓なのか、ということである。これらの土坑の特徴は整った円形の平面形態が多く、袋状をなす土坑もある。遺物は土器の破片や石器類が、とくに層位的な偏りをみせずに出土している。再葬墓であれば完形の大型土器がもっと多し、覆土の中層から上層にかけて土器が破片で出土するのはさほど多くない。弥生再葬墓は石器を多量に包含する例も少ないし、袋状土坑は一般的ではない。以上の理由から、大局的に再葬墓説は否定される。

径1mほどの整った円形の袋状土坑や直立した壁の土坑は、貯蔵穴に一般的な形態である。土坑埋土上層に蓋と思われる粘土層がみられたり、炭化した植物遺体を含む場合もある。したがって、

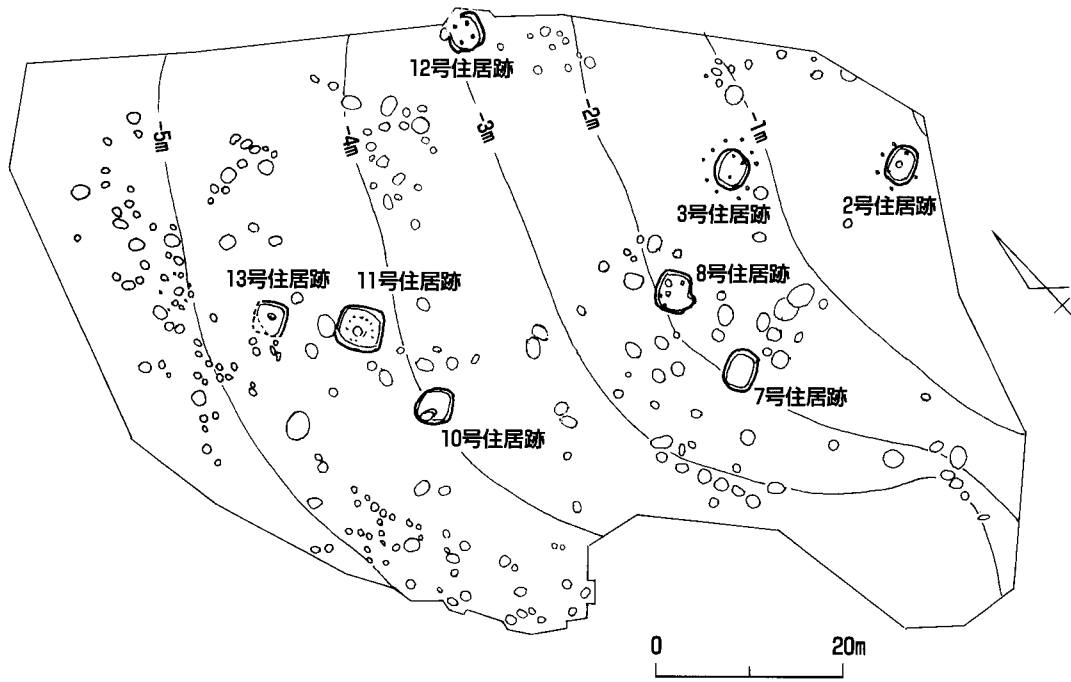


図7 長野県五輪堂遺跡の集落 (弥生I～II期)

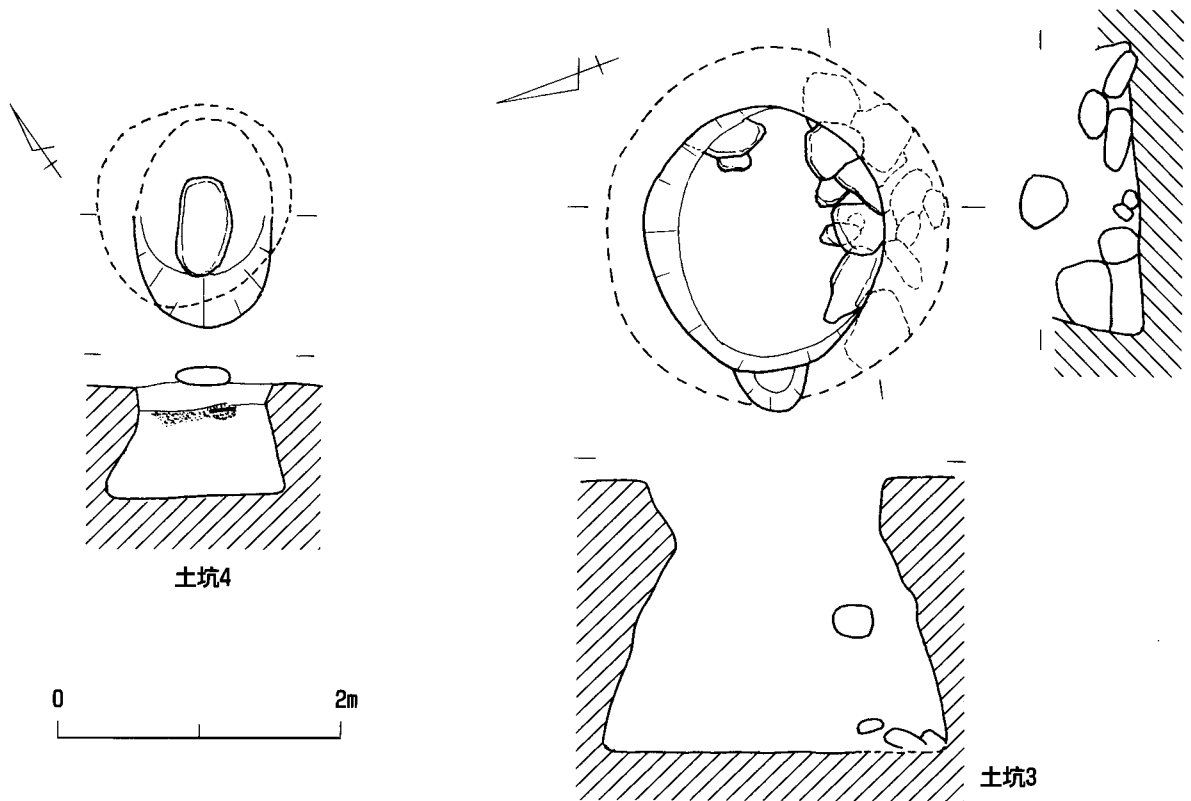


図8 長野県刈谷原遺跡の土坑 (弥生I期)

この時期の台地上に展開する土坑は、貯蔵穴やそれを二次的に利用した廃棄土坑の可能性が高い。堅穴住居に伴う場合があることも、土坑が居住域にかかわる施設であることを裏書きしている。

居住域に伴う再埋葬の可能性をもつ土坑は注連引原Ⅱ遺跡や中野谷原遺跡、神保植松遺跡で合計7例ほどが知られているにすぎず、再埋葬かどうか疑問視されている例を含む。したがって、居住域に伴う弥生再埋葬はきわめて限られている〔小林2003:47頁〕。しかし、神保植松遺跡のように小規模な居住域に2基ほどの弥生再埋葬に伴う集落があることも注目しておきたい。

台地上における小集落の性格 弥生前～中期の集落全体の特徴に目を移していきたい。五輪堂遺跡のように堅穴住居と土坑がセットになって環状をなしていたり、神保富士塚遺跡や注連引原Ⅱ遺跡のように土坑を主体とする場合でもそれが環状ないし弧状をなす例のあることは、縄文時代の環状集落の伝統をうかがわせる。

一方、この時期の関東地方では堅穴住居が検出される遺跡は少なく、多くは土坑だけで構成されるか、あるいは土器などの遺物が散布するにすぎない。表2は、この時期の群馬県域西部を中心とした堅穴住居一覧であるが、そこから読み取れることは以下の通りである。堅穴住居は、弥生前期末～中期前葉にわたるが、一つの集落で二つの時期にまたがるような例は少ない。たとえば注連引原Ⅱ遺跡とその周辺では、注連引原遺跡が弥生前期後葉、すなわち沖式直前の居住域であり、その後注連引原Ⅱ遺跡で沖式期の堅穴住居が営まれた。中期初頭になると、集落はおよそ500m東にある大上遺跡へと移動したようである(図3)。各遺跡の出土土器は数時期にわたる場合があるが、堅穴住居の継続性は希薄で、短期廃絶型の集落といってよい。

堅穴住居は中野谷原遺跡以外、一つの集落で1～4棟と少ない。堅穴住居の少なさは、集落の全域を発掘した例がないからかもしれないが、注連引原Ⅱ遺跡はそれを否定するし、土坑だけが発掘される遺跡も発掘調査面積は狭くはない。やはり、一つの集落で堅穴住居の数は僅少か、あるいは痕跡を捉えにくいのが一般的なのであろう。中野谷原遺跡は堅穴住居や遺物が比較的豊富で、拠点的な性格を帯びているが、土器何型式にもわたる集落ではないし、その他は概して2～4棟程からなる小規模な集落を基本としており、小世帯を中心とした機動性のよさがうかがえる。堅穴住居の構造も移動に適した簡易な様相を呈すのは、小林が指摘するとおりである。集落変遷や短期廃絶型集落の多さからうかがえるように、この時期の集落自体が移動性に富んでいたことが、簡易的住居の一般化をもたらしたのであろう。

このように、台地上の小集落は、核家族的世帯からなる簡素なつくりの小規模住居数棟からなる短期移動型を主体としていた。貯蔵穴である土坑の存在とその群集形態からすれば通年居住が考えられるので、移動は季節ごとにおこなわれたのではなく、たとえば数年単位であった可能性の方が高い。堅穴住居1棟と10数基の土坑に2基の再埋葬が組み合わさる小集落もあるが、居住域に再埋葬に伴うことはまれであり、大規模な再埋葬は伴わない。

第3節 小集落の墓地

小集落の墓地は、どこにあったのだろうか。中野谷原遺跡から1km西に、上人見遺跡という再埋葬がある(図3)。上人見遺跡は注連引原遺跡と同じ弥生前期であり、壺を3個納めた弥生再埋葬が調査された。この遺跡は台地上に点々とする小集落の再埋葬の可能性がある。中期の弥生再葬

墓は、明確な例がまだ知られていないが、周辺であれば、吾妻町前畑遺跡や富岡市七日市観音前遺跡で再葬墓が検出されており、これらの再葬墓は石川日出志がいうように周辺の小規模集落の共同墓地であった可能性が考えられる。

吾妻町岩櫃山遺跡は、麓から400 mも高い切り立った岩山の頂上付近の岩陰に営まれた再葬墓である。類似した性格の岩陰は月夜野町八束脛岩陰など、群馬県域北部の山岳地帯にいくつか知られており、そこでは数十体の焼人骨が出土した。埋設土器をもつ再葬墓だけでなく、岩陰という遺体処理の場もまた、近隣集団共同の葬送儀礼の場であった。

岩櫃山遺跡の周辺には、縄文晩期終末～弥生中期の遺物散布地が点在している〔群馬県考古学談話会1983：200～201頁〕。岩陰は麓からはるかに高い場所にある。なぜそのような場が選択されたかについては、遺体を焼く煙が空に上がっていくという天上他界の観念を背景に理解する意見もあるが〔春成1988：416頁〕、麓の集落から等しく見ることのできる場が求められたことに大きな意味があったのではないだろうか。岩陰というのは、再葬にとっては遺体処理の場であると同時に、焼人骨を遺棄する再葬の最終的な場であって、再葬を施行する集団にとって儀礼の結集点ともいうべききわめて重要な位置を占めていたと考えられるからである。

以上、関東地方の台地を中心とした弥生再葬墓形成期の集落の様相をみてきたが、縄文晩期終末の水Ⅰ式期から弥生前期の沖式期にかけて、沖積微高地に点々と遺物散布地が形成されていることも注意される。なかには群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡のように、遺物包含層に隣接して前期末～中期初頭の大規模な弥生再葬墓が形成される遺跡もある。近隣にはほぼ同時期の森泉遺跡が、そして鮎川をさかのぼった沖積微高地には沖式期前段階の白石大御堂遺跡や中期初頭の緑埜上郷遺跡があり、神流川をさかのぼったところには沖式期の山間遺跡がある（図9）。これらはいずれも沖Ⅱ遺跡の直前ないしそれと併行する時期の遺物散布地であり、沖Ⅱ遺跡という大型の弥生再葬墓を中核として遺跡群が形成されていることがわかる（表4）。

それでは、このような特徴をもつ集落ないし居住単位は、ほかの地域では認められるであろうか。石川日出志は新潟県安田町大曲遺跡という弥生中期前葉の再葬墓遺跡の調査をおこない、あわせてその付近の遺跡を調査した。阿賀野市山ノ下遺跡は大曲遺跡から200 m東南にある同時代の遺跡で、土器は壺形土器に偏らず、甕もたくさん検出されており、再葬墓とは性格の異なる遺跡、すなわち居住に関わる生活遺跡であることが特定された。石川はここが長期にわたって継続して居住するような集落ではなく、比較的ひんぱんに移動する小さな規模の集団だったとしている。さらに、このような集落が、再葬墓の周辺にいくつも残されているという〔石川2000b：28～29頁〕。

②……………小規模移動性集落の出自と性格

第1節 縄文後～晩期の集団編成のあり方

小集団の性格 移動性に富んだ短期的な小規模集落が台地の上などに展開するのは、どのような理由によるのだろうか。百瀬長秀は、中部高地地方において水Ⅰ式期から庄の畑式期、すなわち縄文晩期終末から弥生中期前葉にかけて、小規模短期集落が多くみられることは、遠賀川文化などの



図9 群馬県藤岡市域の縄文晩期末～弥生中期の遺跡分布
(スクリーン・トーンは台地)

表4 藤岡市域の縄文晩期末～弥生中期集落動態

	晩期末	I期古	I期新	II期古	II期新
1					
2					
3					
4					
5					
6					

(番号は左図に対応, セルの濃色は中核的遺跡, 淡色は遺物散布地)

伝播によって在来の広域祭祀圏の衰弱, 伝統的社会体制や価値観の弛緩などによる集落の動揺から分散居住が頻発し, 短命な消長を繰り返したと述べ, 一つの解釈を示した [百瀬 1994:192 ~ 193 頁]。小林青樹はそれを肯定しつつ, さらに小規模, 移動集落形成の背景としてそれを促す生業形態, すなわち焼畑などの畑作を考えている [小林ほか 2003: 47 頁]。

そこで, 分散化した小集落とはどのような内容をもつ集団の居住域なのか, なぜ分散化が生じたのか, さらに問われることになる。なぜなら, 小集団の歴史的性格, 小集団どうしが取り結ぶ関係性について吟味しなければ, 弥生再葬墓造営集団の居住システムや弥生再葬墓造営の意義についても明らかにすることはできないと考えるからである。縄文後期以降の関東地方にみられる分散居住について取り上げて, 葬墓制との関わりとは別の角度からその形成のメカニズムを考えてみることにする。

協業単位としての貝塚 東北地方北部や関東地方南部では, 縄文中期終末から後期前葉に大規模集落が解体し, 小規模分散化することが指摘されている。まずは, 近年分析が進んでいる関東地方南部における縄文後期の小地域に散在する貝塚どうしの関係性をうかがうことで, 縄文後期以降の集団編成のあり方に目を通しておく。

樋泉岳二は千葉市域の都川・村田川流域の縄文中～後期貝塚 (図 10) の貝の種類や季節性などを分析し, 東京湾産のハマグリやアサリが, 河口に近い加曾利南貝塚よりも内陸の誉田高田貝塚で

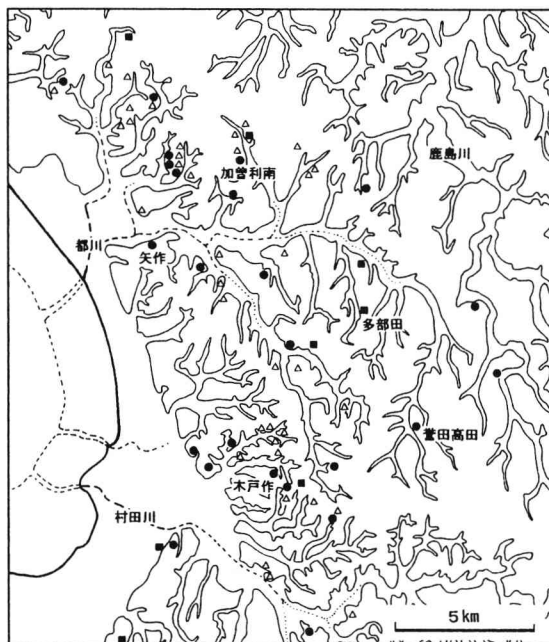


図10 千葉県都川・村田川周辺の縄文時代集落分布
(△中期後半, ■中期後半～後期, ●後期。細線は低地と台地の境, 太線は現在(埋立前)の海岸線を示す。)

高い比率を示す現象に注意を向け、貝採集場は複数集落の入会地的様相をもっていたと考えた。そして、東京湾奥～東岸の縄文中期貝塚におけるハマグリは乱獲状態が認められるのに対して〔樋泉1999b: 299頁〕、後期のそれには未成熟貝の捕獲制限などの配慮が働いていたこと、すなわち、多くの近隣集落の人々が活用した入会地的な様相を呈する場所では、お互いの衝突を避けるような規制が円滑に働いていたことを推測した〔樋泉2003: 36～39頁〕。

金箱文夫も埼玉県川口市赤山陣屋遺跡に縄文後期末葉から晩期にかけて営まれたトチノキの種実の水さらし場遺構など堅果類加工施設が、同じ市域の宮合貝塚、石神貝塚、猿貝貝塚など1km以内にある周辺の集落に居住した人々の共同作業場であった可能性(図11)を考えている〔金箱2003: 66頁〕。

貝塚間相互依存体制の形成 樋泉はさらにハマグリ⁽³⁾の成長線分析を通じて、中核と周辺集落のネットワークに属するメンバーが季節に応じて集落間を移動する柔軟な居住・生業システムを想定している〔樋泉2003: 40～41頁〕。すなわち、漁撈具が多く海産資源への依存度が高い矢作貝塚のハマグリが春から夏に偏り、磨石や石皿の多い木戸口貝塚のハマグリが秋に偏り、陸海の動物遺体や生産用具がバランスよく出土する加曾利南貝塚のハマグリが周年で捕獲されている状況を明らかにし、春は矢作貝塚に周辺から人が集まり、秋には加曾利南貝塚など中核的集落から木戸口貝塚に人が出向いて木の実加工などの労働をおこなったと復元した(表5・図12)。

阿部芳郎は、千葉県印旛沼南岸の縄文後・晩期集落の分析から、やはり複数のムラが堅果類の処理など共同作業をおこなっていた一方で、個々のムラが土偶の集中保有、大型竪穴の構築、土器塚の形成といった生業に関係しない部分において個性的な役割をもっており、そうした個性的なムラが相互に依存し合う地域社会を描いている〔阿部2003: 96～98頁〕。

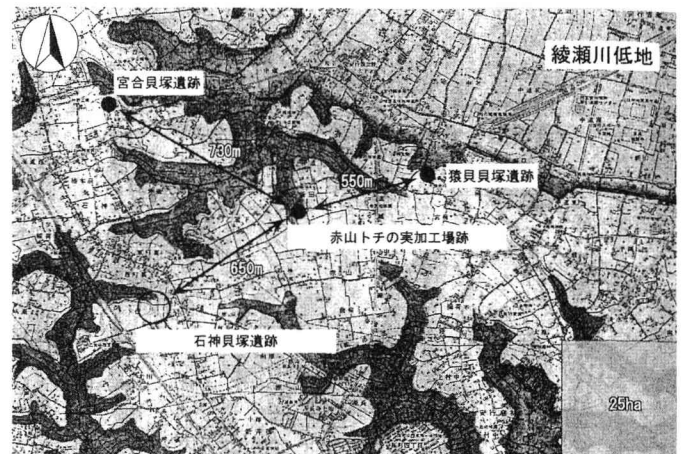


図11 埼玉県赤山陣屋遺跡とその周辺の集落分布
(縄文後～晩期)

表5 都川-村田川水系の貝塚における生産用具組成

種類		矢作	加曾利南	多部田	菅田高田	木戸作
狩猟具	石鏃・骨鏃	21	8	1	2	0
	骨角製刺突具	17	8	0	1	1
漁労具	釣針	10	0	0	0	0
	土器片鏟・石鏟	9	19	1	2	2
植物採集・加工具	打製石斧	8	22	0	6	44
	磨石類	21	48	2	6	129
	石皿	9	13	1	2	62
合計		95	118	5	19	238

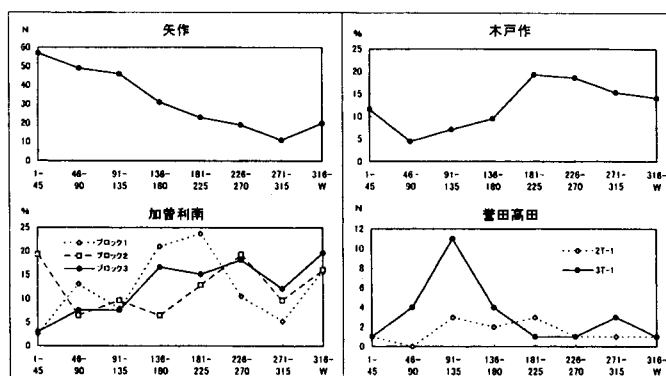


図12 都川-村田川水系の各貝塚における二枚貝(ハマグリ等)の採集季節分布
 (横軸の数字は2月中旬を起点とした死亡日までの日数。1～90:春, 91～180:夏, 181～270:秋, 271～W:冬。)

縄文後・晩期に至近距離にある集落間では特徴的な生業，経済活動が異なっており，社会的な分業とまではいかないが，それに似た体制が存在したことは，上述の関東地方を例とした貝塚の分析によって，ある程度妥当だといえよう。分散居住には，バイオマスに限界がある生産領域を相対的に拡大する働きも期待できる [林 2004a: 205 頁]。周辺環境や生態系などに応じて生業活動や儀礼に特色を持たせた分散化（分節化といったほうがふさわしい）や集落の連携が，縄文後期以降の関東地方における集団編成の基本戦略の一つであった。

第2節 小集団の社会的機能と性格

二つの問題点 集団が分散化する前の南関東地方の縄文中期中葉には，環状集落に代表される巨大な集落が形成されている。千葉県市原市草刈貝塚などはその代表的な例であり，重複する竪穴住居跡群が，いくつか集合して環状に配列されている（図13-1）。南関東地方では加曾利EⅢ式期に大型集落は終焉を迎え，加曾利EⅣ式期から称名寺式期に小規模集落が形成されるという動向が指摘されている [山田 1995: 64～65 頁]。同じ傾向は東北地方でも確認され，中期末～後期にかけて集落は分散化する。おそらく寒冷化を伴う環境変動により，そうした事態が引き起こされたものと考えられる [設楽 2004b]。

ところが，秋田県鹿角市大湯環状列石のように墓地には相変わらず巨大なものがある（図13-2）。関東地方でも，後期前葉における中妻貝塚の多人数集骨葬人骨は100体を超えており，一つの集落の居住員というよりは，複数集落の人々の共同墓地とみなした方がよい。長野県安曇野市北村遺跡や愛知県田原市吉胡貝塚の300体を超える埋葬も，後期前葉，晩期前葉という時期がそれらの

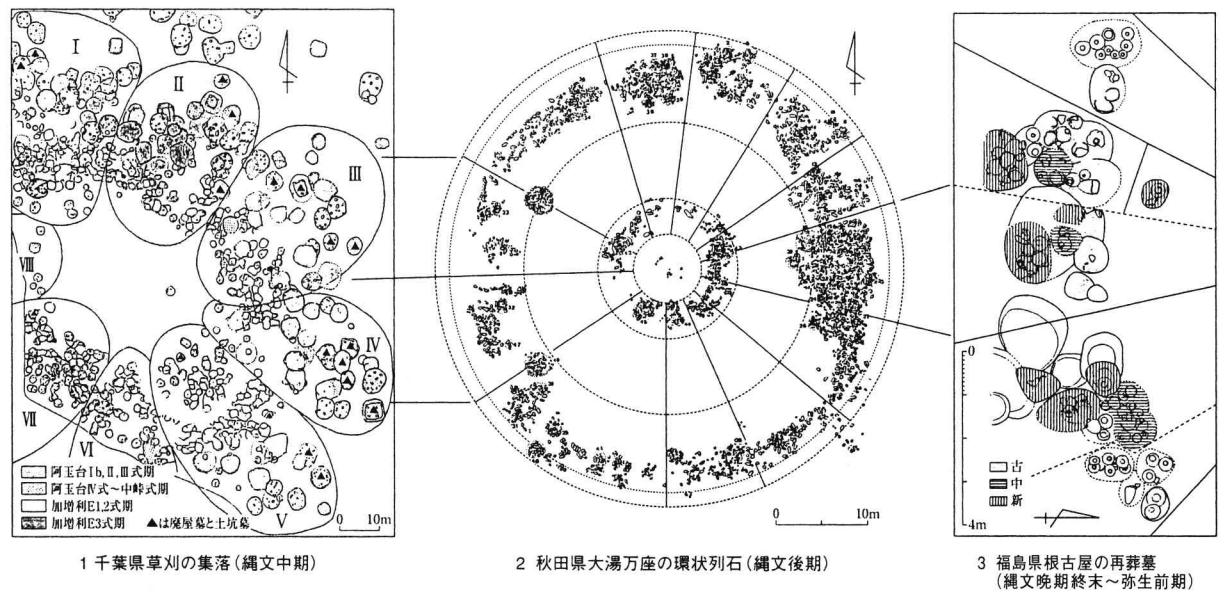


図13 居住域と墓域の比較（縄文中期～弥生前期）

地域で居住域の実態が不明な時であるだけに、やはり共同墓地として理解するのが妥当だろう。

青森市内丸山遺跡が中期末葉に衰退していくように、自然環境の影響を受けやすい採集狩猟民にとって、集落の肥大化は大きな危険を伴うものであった。集団の分節化は、それを回避する有効な手段だったといえようが、問題は、こうした分散居住が社会関係をどのように組みかえ、あるいは維持しながらなされたのかということと、墓地が相変わらず巨大なことの理由、その二点である。

縄文集落の基礎構造 谷口康浩は縄文早期末葉ないし前期初頭における環状集落や集団墓の形成は拠点集落が形成されたことを意味するとし、それは自立化傾向を強める単位集団を結びつけ、全体的な社会秩序を維持するための社会組織として、集団を統合することを背景として成立したと捉えた。集団墓地はそれまでの血縁関係に出自規制が厳格化して出自集団が制度化されて形成されたものであり、出自集団の出現が拠点集落形成の基礎をなしたと考えた〔谷口2004:197～201頁〕。

草刈貝塚（図13-1）を例にとって谷口の分析を適応させると、堅穴の小群が出自集団である単位集団に相当し、集落全体がそうした複数の出自集団によって入れ子状の分節構造をなしていることになる〔谷口2005:108～109頁〕。単位集団とは、世帯がいくつか集まり累積した世帯群である。世帯は、世帯構成員の再生産の基盤であると同時に日常的な生計をともにする集団であり、血縁関係を基軸に結びつきたいわゆる家族という親族構造の末端組織単位である。堅穴住居が世帯の生活を展開する主要な場であるが、堅穴住居の出現は縄文草創期にさかのぼることからすれば、縄文時代の社会において、世帯が集落の組織構成単位として果たした役割はきわめて大きいといわなくてはならない。

ここでの問題は、どのようにして縄文中期の巨大な集落が解体していくのか、その際に世帯はどのような動きをするのか、ということだが、それを考えるには集落の移動についての議論を踏まえておく必要がある。集落移動の議論は多くないが、林謙作の分析は注目できる。

林は、離村・移村という現象には「斉一的な村をあげての」動きと「非斉一的な一部家族の」動

きが交錯していたという水野正好の意見〔水野 1969：13 頁〕に注目し、現在の研究の趨勢は前者を基本とすると認識したうえで、むしろ後者の動きの方が実態的ではないかとした〔林 2004b：45～54 頁〕。すなわち、すべての縄文集落の動態を説明するものではないが、斉一的な転出・転入とは程遠い、離合集散を繰り返している可能性が高い、というのである。このことは、大湯万座環状列石の群構成を分析し、小群間に埋葬数の著しい寡多が認められ、その不均等こそが、長く万座周辺にとどまった世帯と、そこを墓域として利用できないほどの距離まで移動、移住をした世帯の存在を裏書する、との考えにもとづいて導かれた説である⁽⁴⁾。

分節単位としての小集団の出自と性格 林の移動論が正しいとすれば、集落における基礎単位としての世帯の日常的な結合度の強さや機動性にすぐれた点を考慮すると、いくつかの住居群からなる肥大化した環状集落が解体、分散化していく際には、住居や住居群すなわち世帯ないし世帯群を中心に移動した可能性が高いのではないかと推察される。分散化した小集団は、草刈貝塚などの環状集落の一単位となっていた際には分節構造の末端組織であったが、分散化後も、それは出自の原理にもとづいて共通の祖先を認識する親族集団である出自集団 (Descent-group) あるいは単系出自集団 (Lineage) として機能したであろう。最小単位のリネージが、領域や資源を共有し継承する単位をなし、地縁的にもまとまっている場合が多いことは、一般化できるという〔谷口 2005：114 頁〕。

このように論を進めてくれば、分散化の単位となったであろう草刈貝塚などの世帯群は、他人どうしであったというよりも、たとえば婚姻を契機に独立した世帯を形成することによって世帯が増加していった結果というような、何らかの血縁関係によって結びついた同族⁽⁵⁾と考えるのが妥当である。したがって、分散化した小集団どうしにも同じような性格を考えるのが無理はない。これは、先に指摘した用益権の衝突を未然に防いでいる規制を説明するうえでも、適切な理解である。

樋泉らが分析した縄文後期の貝塚は、もとを正せばこのような分節構造を基軸に、中期の肥大化した集落が分散化をすすめる経緯のなかで生まれた集落と考えられ、加曾利南貝塚などは後期前葉以来の好適な自然環境に恵まれ、あるいは生業の季節的な協業などの必要から時には分節構造の統合化なども経ながら、再び肥大化していった集落ではないだろうか。入会地で規制が円滑に機能したのは、リーダーの権限が強化されたことも考えられるが、それを利用する分節化した集団がもともと血縁関係にある同族⁽⁶⁾だったことが、大きな理由だったと考えられる。

第3節 共同墓地とその造営集団

墓地が巨大な理由 分散化した小集団の出自が、かつて拠点集落において分節化していた世帯を基礎とする単位集団であった可能性を考えた。それが認められるならば、分散化した後も分節化した出自集団の紐帯はなおも維持されていたであろう。だからこそ、分散化した小集団の統合の象徴として、環状列石のような共同祭祀施設⁽⁷⁾が機能しているのである〔小林 1986：65～67 頁、小杉 1995、谷口 2004：201 頁〕。

大湯環状列石などの墓地が分節化された小集団の集まりであるという理解は、水野正好〔水野 1968：257 頁〕、林謙作〔林 1977：229 頁〕、春成秀爾〔春成 1979：39 頁〕らによって形成されてきた。こうした意見を参考にすれば、縄文時代の墓域にみられる小群－埋葬小群－は、集落で確認できる

世帯群の埋葬区とみなされる。そして、婚入者を含む世帯原理は出自原理と矛盾をきたすため、晩期になると埋葬小群はさらにその中が出自原理と世帯原理によって分割されるようになるという〔林 1980：282 頁，春成 1980：328 頁〕。つまり、墓域には血縁と世帯という二つの矛盾原理の相克が反映しているのである。

小杉康は長野県北村遺跡の墓域を分析して、列墓という形で出自別墓制をなしていた埋葬が、後期前葉になるとそれに加えて住居跡への偏りが顕著になることを認め、林や春成の想定した出自別墓制から出自・世帯別墓制への移行がここにも当てはまることを確認した〔小杉 1995：132 頁〕。このような集団内部の分節化傾向としての世帯の相対的な自立化に対して、それを抑制する機能として血縁的系譜関係の確認が強化されることとなり、その結果、間接的経験的観念的祖先観〔桜井 1974：84～87 頁〕にもとづく祖先祭祀、すなわち直接的な死＝臨機的な死に伴うものから発展した恒常的な祖先祭祀が発達したことと、そのための集団統合のシンボル機能をもった葬墓祭制空間が、大規模配石施設として形成されたことを論じた〔小杉 1995：143 頁〕。

このような空間が成立すると、分散化した世帯や世帯群も系譜関係の確認装置によって自立化が押さえられていくことになり、墓地が相変わらず巨大なままでも何ら支障はなかった。というよりも、巨大であるがゆえに同族関係にある出自集団同士の共同性を確認するモチベーションを高め〔林 1977：48 頁〕、集落の肥大化を分節化によって抑止していくことがより円滑におこなわれるようになったと思われる。

弥生再葬墓とその造営集団 このように考えてくると、縄文晩期から弥生時代初期の小集落分散化の要因は、百瀬がいうように農耕文化の影響による祭祀の弛緩を背景とすることももちろん考えなくてはならないが、集落の肥大化あるいは気候寒冷化による資源枯渇という採集狩猟社会のリスクを抑制するためのメカニズムとして、小集落分散居住が生活戦略として採用されていったことが第一に考えられよう。そうした関係性は縄文後～晩期以来の集団関係に根ざしていた。

したがって、縄文時代の環状集落の構成を維持している点から縄文集落の構造を継承していたとみなされる弥生前期の台地上に散在する小集団どうしは、血縁関係を継承した世帯群を基礎単位とする集団関係をなし、血縁原理によって強固な社会的紐帯を保っていた可能性が高い。

弥生再葬墓に分散小集団という同族結集の原点である共同墓地としての性格を考える妥当性も、そこに求めることができるのであり、小型の集落ないし遺物散布地という形をとる居住域に対して、根古屋遺跡など大型再葬墓の墓域が環状をなしたり内部が埋葬小群に分節化していること〔設楽 1993：35 頁〕の要因も、そこに求めることができるのである。つまり、埋葬小群が分散化した小集落の墓域であり、再葬墓地全体が分散集団の共同墓地であるという石川日出志の考案の妥当性は高いといえよう（図 13）。かつて、筆者は根古屋遺跡の墓域を一つの居住集団と対応させたが〔設楽 1993：40 頁〕、それは改めなくてはならない。

先述のように小林青樹らは小規模、移動集落形成の背景としてそれを促す生業形態、すなわち焼畑などの畑作を考えているが、必ずしも実証的にそれを明らかにしているわけではない〔小林ほか 2003：47 頁〕。小林の予見した移動性の強い集落の生業形態について、具体的な資料にもとづいて議論していくことにしよう。⁽⁸⁾

③……………再葬墓造営集団の生業形態

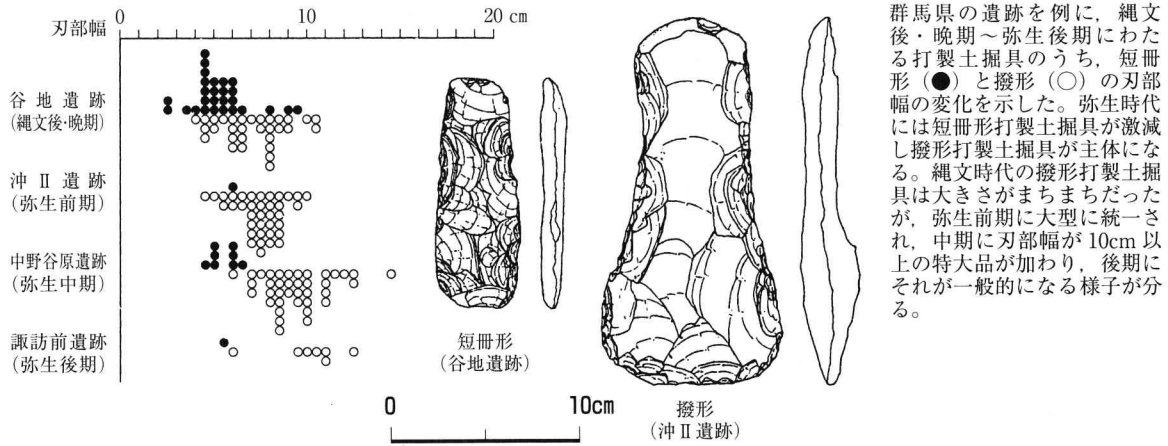
第1節 生産用具をめぐって

石器の機能変化 まずは生産用具としての石器であるが、弥生前期から中期前葉の台地上の小集落に顕著な道具として石鍬が知られている。打製土掘具である打製石斧が縄文後・晩期に西日本を中心に発達し、それが大型化した石鍬は陸耕に用いられた可能性が早くから議論されてきた〔藤田1956：6頁・春成1969：25～27頁〕。石鍬は弥生後期の長野県下伊那地方などでも主要な農具であったとされる〔松島1964〕。関東地方の初期弥生文化でもその傾向は指摘されており〔春成1986：124頁〕、伊勢湾地方の同時期の石器組成と比較して農具としての機能が類推されてはきたものの〔石川1988〕、縄文晩期の打製土掘具がどのように変化していくのか、という具体的な分析はまだ少ない。

図14は先述の群馬県北西部の地域を例にとって、打製土掘具の大きさが形態に応じてどのように変化するのか分析したものである。縄文後～晩期の群馬県藤岡市谷地遺跡の打製土掘具は大きく分けて、分銅形・短冊形・撥形だが、撥形打製土掘具の刃部幅を示したグラフには4,5cm, 6～7cm, 8cmの三つの峰ができていて、10cm以上の特大品もある。それに対して弥生前期の群馬県沖Ⅱ遺跡では、谷地遺跡でもっとも大きな刃部幅のピークである8cm前後に集中する。さらに弥生中期前葉の中野谷原遺跡では8cm付近の他に、特大の品が増加しており、後期の群馬県吾妻町諏訪前遺跡では特大にほぼ特化していることが分る。一方、谷地遺跡でかなりの数を占めていた短冊形打製土掘具は弥生時代になるととたんに減少するものの、後期に至るまで用いられており、刃部の幅には変化がない。

このような大きさの変化は、石材の変化とも密接に関係している。谷地遺跡の打製土掘具の多くは頁岩やホルンフェルスであったが、沖Ⅱ遺跡では凝灰岩が主体をなすようになり、中野谷原遺跡ではその多くが安山岩になっている。安山岩は薄く割れやすいので、大型の板状剥片を素材として準備するのに適している。その一方、諏訪前遺跡では短冊形打製土掘具に縄文時代以来の頁岩が用いられていた。大きさと同じく撥形打製土掘具だけ素材の変化があったのは、短冊形打製土掘具の機能は変わらなかったのに対して、撥形打製土掘具の主要な機能に変化があったことをうかがわせる。その変化とは、大型化と偏平化である。それは地面を幅広く掘り起こし掻くような行為、すなわち耕起に適した改良であって、短冊形打製土掘具が変化しないのは、自然薯など根茎類を掘るための機能〔今村1989：74頁〕が一貫していたからであろう。

打製土掘具とセットで問題にされてきたのが、打製穂摘具である(図15)。それはいわゆる横刃形石器という、貝殻状の剥片の側縁に剥離を加えたり、鋭い刃を調整せずに用いた石器である。中野谷原遺跡の横刃形石器50点の使用痕を顕微鏡観察した高瀬克範は、そのうちの6点にBタイプというイネ科の植物を切断したときなどにできる特徴的なポリッシュ(図15-A・B)を確認した〔高瀬2004a〕。長野県松本市石行遺跡は縄文晩期終末の水Ⅰ式(新)段階の遺跡で、ここから出土した両端に抉りのある横刃形石器(図14-4～6)が数点認められる〔設案1995：185～186頁〕。



群馬県の遺跡を例に、縄文後・晩期～弥生後期にわたる打製土掘具のうち、短冊形(●)と撥形(○)の刃部幅の変化を示した。弥生時代には短冊形打製土掘具が激減し撥形打製土掘具が主体になる。縄文時代の撥形打製土掘具は大きさがまちまちだったが、弥生前期に大型に統一され、中期に刃部幅が10cm以上の特大品が加わり、後期にそれが一般的になる様子が分る。

図14 打製土掘具の大きさの変化(縄文後期～弥生後期)

1～6は長辺に刃がついた横刃形石器。200倍の顕微鏡で刃の部分を観察したところ、光沢が見出された(図1～3の○は使用痕が観察された範囲で、●はそれが顕著な部分)。この種の使用痕は木を切ったりイネ科の植物を刈り取ったときに特徴的に現れるパターンであることが、実験で確認されている。横刃形石器には短辺に抉りが入るものもある(4～6)。1～3は群馬県安中市中野谷原遺跡出土。4～6は長野県松本市石行遺跡出土。

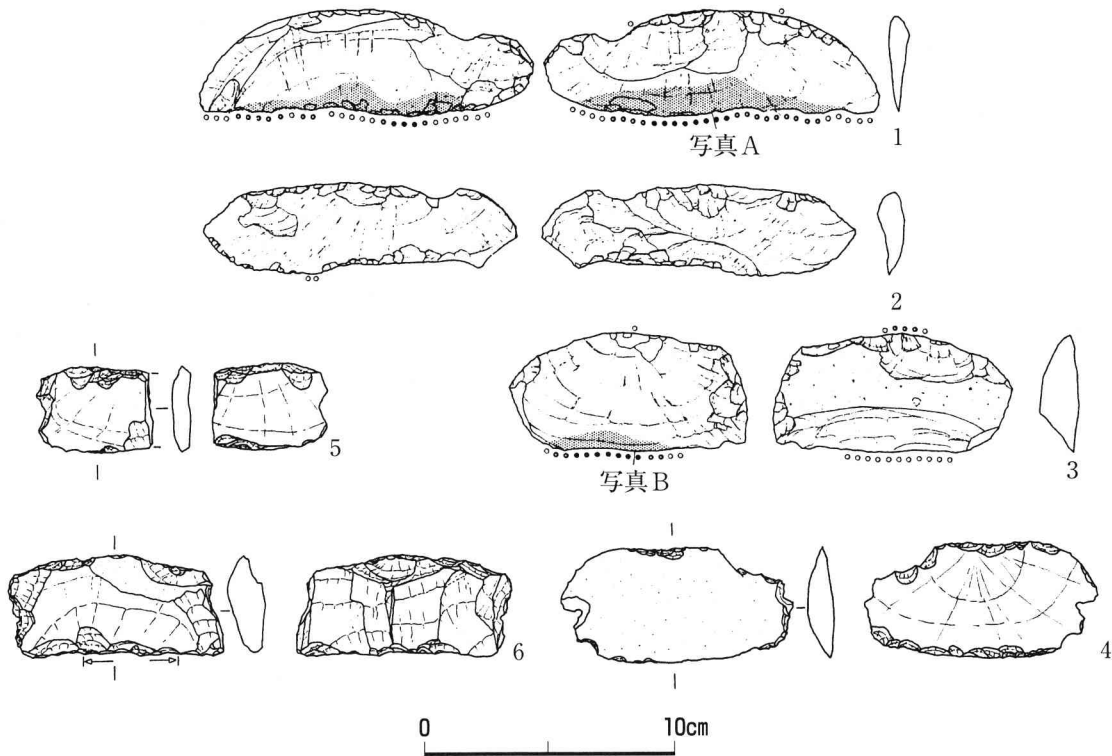
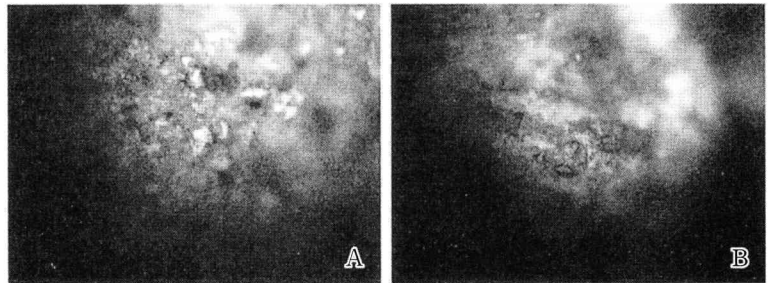


図15 横刃形石器(縄文晩期終末・弥生Ⅱ～Ⅲ期)

中国地方の弥生時代あるいは中国新石器文化における打製石庖丁に特有の仕様であり、この時期の中部高地に西日本の農耕文化の要素が加わったことが分る。このような例から、中部高地・北関東地方の初期弥生文化にみられる横刃形石器の一部は、陸稲あるいは雑穀類の穂摘みに使用された可能性が考えられる。

土器組成の変化 中部高地・関東地方では氷Ⅰ式(新)段階から、東海西部地方などの影響によって大型壺がみられるようになる。この段階では数%にすぎない壺形土器の比率が、弥生前期末の沖Ⅱ遺跡では20%になり、中期中葉の埼玉県行田市池上・池守遺跡では50%近くを占めるようになる。

壺形土器の比率が15～30%になるのは、北部九州では佐賀県唐津市菜畑遺跡8層下の弥生早期後葉の夜臼Ⅱ式から福岡市板付遺跡の前期初頭板付Ⅰ式の時期、大阪府八尾市山賀遺跡の弥生前期中葉の遠賀川系中段階、名古屋市古沢町遺跡の弥生前期中葉の貝殻山式段階で、西日本で農耕文化が本格化した時期である。時期を追うごとに、その比率は増えていることがわかる。壺形土器の組成比率の増加は、農耕の進展と関係が深い。弥生前期から中期前葉の北西関東地方で、石器の機能が農耕に適するものへと変化していったことを述べたが、それは土器の変化にも当てはまる。

第2節 穀物栽培の実態

それでは、中部高地・北西関東地方で実際に初期弥生文化の耕地や穀物がどれほど検出されているのだろうか。耕地については山梨県韭崎市宮ノ前遺跡から、氷Ⅰ式期終末ないしそれに続く弥生前期終末の水田跡が検出されているだけである。縄文晩期の^{いしきょう} 石行遺跡で晩期後葉の五貫森式期の鉢形土器に確認されているにすぎない。山梨県韭崎市中道遺跡の氷Ⅰ式土器に残された圧痕は、筆者が^{いしきょう} 石行遺跡として報告したものだが、中沢道彦と丑野毅の顕微鏡分析にもとづく松谷暁子の判断によってオオムギであることが確かめられた[中沢・丑野1998]。弥生前・中期になると^{いしきょう} 石行遺跡は若干ではあるが増えるようになる。群馬県渋川市押出遺跡の遠賀川系土器が前期のもので、神保植松遺跡の小型土器が中期前葉の例である。

このように、耕地や穀物の検出例はまだ少ないが、神奈川県中屋敷遺跡では、きわめて注目すべき調査結果が報告されている。土坑の分析の際に触れたように、この遺跡は台地上の小集落であり、かつて弥生前期末の土偶形容器が出土した遺跡である。近年の発掘調査で、貯蔵穴と思われる土坑が複数検出されたが、22号土坑から、多量の炭化米とアワ、若干のキビが出土した(図6)。とくにコメは300粒以上、アワは1000粒以上と多量である。土坑の時期は前期後半で、炭化米のAMS炭素14年代測定結果もその年代と矛盾がない。プラントオパール分析の結果から、イネの茎も存在していたことが判明しており、交易などによってコメが持ち込まれたのではなく、周辺で栽培されていた可能性が考えられている[佐々木2005]。アワが多量に出土していることから、陸耕がおこなわれていたことは間違いなし、稲も陸稲として栽培されていた可能性がある。

中部高地・北西関東地方では、縄文晩期終末の氷Ⅰ式期に生業変化、すなわち農耕化の端緒が現れ、弥生前期後葉以降それが顕著になることを、石器の機能変化や土器組成の変化などから間接的に明らかにしてきた。弥生前期後葉を大きな画期とする文化変化は、中屋敷遺跡の調査結果からすれば、穀物栽培という生業の転換によってなしとげられたことが明らかである。この時期の関東地

方で、耕地や穀物が捉えにくいのは、イネに加えてアワやキビなど小粒の雑穀類の畠作を取りこんだ農耕が、おもに台地で小規模に展開していたためである⁽¹⁰⁾。

第3節 小規模移動性集落の生業形態と再葬との関係性

安中市域の台地上では、縄文時代の大きな集落が台地中央付近に占地する傾向があるのに対して、弥生時代の集落は台地の落ち際に立地する。日あたりと水はけのよい斜面が耕地として選ばれ、開墾されたのではないか。台地の土壌のプラントオパール分析結果は、縄文前期以降火山灰土壌にネザサ節の植物が増加していく傾向を示している。石鍬が大型化するのには、幅広く土を掻くという目的の他に、ササ類の根を断ち切る重さを確保するためだった可能性⁽¹¹⁾がある。

大工原豊によると、中野谷原遺跡の石器総量は、拠点集落でありながらも縄文時代の同規模の集落などに比べて少ない。巨大な石皿が出土しているが、据え置かれたまま遺棄されている。縄文時代に一般的な40cmほどの大きさの石皿は少ない。移動に不向きな大型の道具を減らし、大型の道具を使わなければならない作業は共同でおこなったようである。移動を円滑におこなえるように、機動性をよくするための配慮と考えられる。

集落の立地条件と規模、居住期間の短さ、浅床住居の一般化、重量のある石鍬の増加と横刃形石器の使用状況、石器総量の少なさなどからすると、関東地方の弥生時代初期における移動性に富んだ台地上の小規模集落の生業は、地味の低下などを考慮しながら移動する、切り替え畠のような陸耕に比重がおかれていた可能性⁽¹²⁾が高い。台地上に展開する小規模移動性集落は、縄文時代の集団編成をそのまま受け継ぐ性格をもっていたが、集団が受け入れていった農業形態は、河岸段丘などでの簡素な水田稲作を組み込んでいたものの、大規模な協業を必要とする低地を大がかりに開発する灌漑農耕ではなかつた⁽¹³⁾。

気候寒冷化などの影響によって人口が極端に少なくなった関東地方でも、農業という新基軸経済の採用によって新たな活路を見出そうとしたが、灌漑農業に舵を切るとは集団の規模からしても無理があった。上述のような農耕形態の選択の理由は、そこにある。すなわち、集団の規模や立地条件をそのまま活かした農耕形態を採用し、その経営へと移行していったのである。

したがって、台地上の小規模移動性集落と、そうした性格と相即的な農耕形態、そして小集団をつなぎとめている再葬とは、中部日本初期弥生文化を特徴づける不可分な文化・社会関係態⁽¹⁴⁾であった、という小林青樹らの理解は妥当である。

④……………関東地方における本格的農耕集落の形成過程

第1節 小田原市中里遺跡をめぐって

中里遺跡の発掘調査とその成果 1991年から99年にかけておこなわれた神奈川県小田原市中里遺跡の発掘調査によって、弥生中期中葉、すなわち弥生Ⅲ期前葉の巨大な集落が姿をあらわした。関東地方のこの時期の集落は近年にいたるまで小規模なものがいくつか知られていたにすぎなかったが、大規模農耕集落がすでに形成されていたことがわかり、その形成過程があらためて問題に

なった。これまでに明らかにされた調査成果〔戸田 1999・(財) かながわ考古学財団ほか 2000・小田原市教育委員会 2000 など〕にもとづいて、中里遺跡の性格をまとめておこう。

中里遺跡は酒匂川がつくった三角州の末端付近、標高およそ 10m の沖積微高地に立地する。旧河道に面した範囲から、99 棟の竪穴住居跡が検出された (図 16)。竪穴住居は隅丸長方形のものが多く、それ以前に比べて整った形であると同時に、後の宮ノ台式の住居に近い形態をなす。大小 10 棟ほどの竪穴住居が一つの群をつくり、それが数単位集まって居住域を形成している。最大 3 回程度重複した住居や接近している住居があるので、各群は一つの時期に数棟の竪穴住居から成り立っていたと思われる。各群の中心の空間に独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物が 3 棟みられる。各群には貯蔵施設や作業小屋と考えられる掘立柱建物と、土器破片や炭化米などを含んだ廃棄土坑が付随している。井戸が数基、居住域の一角に群集している。

墓域は居住域の東南にある。中心に埋葬施設をもつ方形周溝墓が 46 基検出された。墓域は 6 つほどの大群からなり、各群はさらに 2～3 基ほどの接続したり溝を共有した小群から成り立っている。重複した墓があり時間的推移が考えられるが、ごくわずかで、長期にわたって営まれた墓地ではない。墓の群集の仕方は、竪穴住居群と共通点が多い。それらに対応するとすれば、接続する 2～3 基からなる方形周溝墓は、重複した竪穴住居構成員の墓とみなせるのではないだろうか。

鍬やその未成品である木製農具が出土している。石器は太型蛤刃石斧とその未成品、扁平片刃石斧、抉入柱状石斧といった大陸系磨製石斧 3 点セットを完備しているので、それで木製農具を製作していたのだろう。さらに炭化米の存在や畦畔の杭列などからすると、水田は見出されていないが水田稲作を本格的におこなっていたことは疑いない。

サヌカイト製の西日本起源の打製短剣が出土している。打製短剣と同じく、遠隔地からもたらされたものに土器がある。三河地方や南東北地方に系譜が求められる外来系土器もあるが、とくに近畿系土器が多く、土器全体のおよそ 5% を数えるにいった。近畿系の土器には壺のほかには甕や高坏があり、胎土は在地の土器と異なっている。

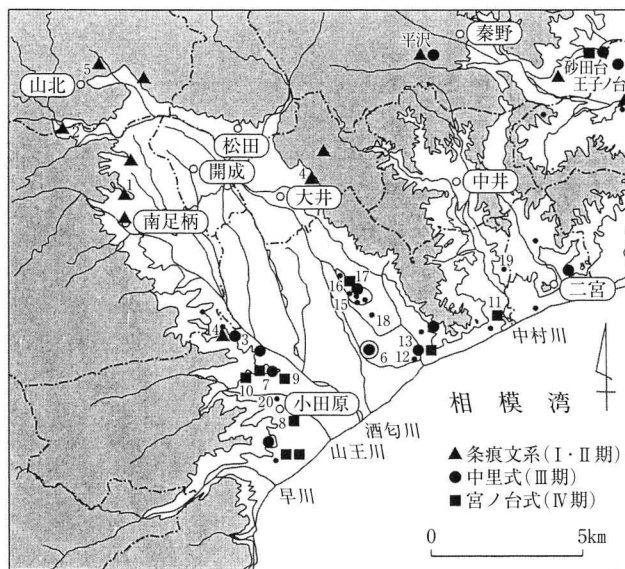
中里遺跡は環濠こそもないが、自然流路がその機能を代替していたと考えられ、それに沿った居住域にさまざまな日常施設や祭祀施設をもち、隣接した場所に水田と墓地を設けている。竪穴住居や住居小群が日常的な消費と生産の単位をなし、灌漑や耕作といった規模の大きな労働の際に集落総出で作業にあたったのだろう。これほど規模が大きく整った設備をもつ農耕集落は、どのようにして出現したのであろうか。⁽¹⁵⁾

中里遺跡の形成過程 石川日出志は中里遺跡や埼玉県池上・小敷田遺跡、千葉県君津市常代遺跡など、中期中葉の集落に共通するのが低地占地であり、低地における大型集落が小規模集落の群集を組織する拠点の役割を果たしたとする〔石川 2001 : 87～88 頁〕。小林青樹は、中里遺跡などは水田経営をするために周辺住民が結集し、一緒に集住して新たな共同体を形成したとみなす〔小林 2003 : 69～70 頁〕。石川の結論は中里遺跡と同時期の周辺小集落を取り上げた結果であり、中里遺跡の形成過程については触れていないが、小林と似たような考えを巨大集落形成の背後に想定している。⁽¹⁶⁾

中里遺跡形成期の集落としては、他に神奈川県平塚市王子ノ台遺跡が知られているが、竪穴住居跡 9 棟と土坑 7 基からなる小集落である。単純に計算すれば中里遺跡はその 10 倍以上の規模であり、



図16 神奈川県中里遺跡の集落(弥生Ⅲ期)



		弥生時代				
		晩期	前期	中	後期	後期
		I ▲	II ▲	III ●	IV ■	V
1	怒田上原					
2	内山尾尻					
3	府川諏訪の前					
4	中屋敷					
5	堂山					
6	中里					
7	久野山ノ神					
8	谷津(小田原)					
9	多古白山					
10	久野中里					
11	羽根尾塚の上					
12	国府津町畑					
13	国府津三ツ俣					
14	北ノ窪小原					
15	千曾					
16	永塚					
17	下曾我					
18	高田					
19	殿窪					
20	久野下馬下					

図17 足柄平野の集落変遷(縄文晩期～弥生後期)

3 時期にわたる点を差し引いても3倍以上の規模である。王子ノ台遺跡はそれでもこの前後の集落としては規模が大きい方で、弥生中期中葉という中里遺跡形成に象徴される時期だからこそ、集落規模が拡大したのであり、それ以前の集落はもっと小規模であったとみなくてはならない。また、これだけの人口が単一小集団の水田稲作経営による増殖の結果とは、とても思えない。中里遺跡の土器は大半が在地の系統で占められている。したがって、その型式圏外から移住してきた集団が形成した集落とは考えがたい。こうした点からすれば、前段階の周辺小規模集落が結合して大規模な集落を形成したことと、それが微高地における灌漑農業という多大な労働力を投下する必要がある生業活動の開始を背景としたものであるという見解に、異論はないであろう。

図 17 は大島慎一による足柄平野を中心とした集落の変遷である [大島 2000 : 9 頁]。縄文晩期以来の集落がいくつかあるが、いずれも酒匂川の上流ないし中流の山麓や台地上にあり、平野の中にはない。中屋敷遺跡をはじめとして、これらはいずれも規模の小さな集落である。そして多くの遺跡が縄文晩期終末から継続しており、諏訪の前遺跡をのぞくとみな弥生Ⅱ期、すなわち中里の集落が出現する前段階に姿を消している。この図から読み取れる現象に対して筆者は、中里遺跡はこれら山麓の小規模集落の集団が山を降り、結集して形成した結果だ、とその形成主体をより絞り込んだ [設楽 2004a : 4 頁]。しかし、中里遺跡はⅢ期でも最古ではなく、Ⅱ期との間に遊ヶ崎段階がはさまる。まだその時期の集落や遺跡が足柄平野では未発見であり、石川が中里遺跡形成の前段階について不問としたのも、そうした理由から慎重を期したのであろう [石川 2000a : 758 頁]。

したがって、筆者の見解にも注釈を加える必要がある。それはすなわち、中里遺跡成立直前のⅡ期からⅢ期にかけて、台地上にそれ以前と同じような性格の集団が居住していた可能性と、すでにそれらが沖積微高地に占地していた二つの可能性を、中里遺跡が成立する前提として考えなくてはならないことである。前者の可能性をとった場合には大規模灌漑水田稲作が突如開始された画期性が評価され、後者の場合にはⅡ期からⅢ期にかけての水田稲作の模索段階が評価されることになるが、多分に予測を含むことなので、ここでは中里遺跡の前段階の集落との間にみられる規模や組織化すなわち性格の差の大きさに注目し、やはり前段階との間に、農耕生産の開始によって人口などが増加しただけではすまされない、小集落結集のような何か大きな変化のあったことを推定しておくだけにして先に進もう。

中里遺跡における堅穴住居小群の系譜と性格 小林青樹は、独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物を中心として環状に住居群が形成されることに注目するが [小林 2003 : 70 頁]、中里遺跡の住居群の配置にはそれとは異なるさらに重要な点が指摘できる。それは堅穴住居が複数の小群からなり、そのいくつかは環状をなしているようにみえる (図 16) ことである⁽¹⁷⁾。重要な点は、それがいわゆる低地占地型大型農耕集落形成の一つの原初形態だと思われるからであり、中里遺跡の形成の特殊性、それ以前の集落からの大きな変化を解く鍵になるのである。

すでにみてきたように、中里遺跡に先立つ関東地方には、堅穴住居や土坑が環状にめぐる集落があった。したがって、中里遺跡の環状をなす堅穴住居小群は縄文文化の伝統を引き、弥生中期中葉に継承された要素とみてよい。それが複数集合していることが、中里遺跡がいくつかの小集落の結合体だったことを裏書している。第②章において縄文後期から晩期の東日本では集落が分散化する場合があることと、分散化は機動性がよく血縁などの紐帯による結びつきが強い、世帯および世帯

群を基軸になされたことを推測した。中屋敷遺跡のような小集団，中里遺跡の数棟の堅穴住居からなる小群，それらはもとを正せば縄文時代の環状集落の構成単位であった，世帯群－分節化した出自集団－ではなかつたらうか。そして，縄文後期の親族組織を母体に分散した小集落が円滑に社会的分業のような機能を果たしていたのと同じく，低地における水田稲作という協業に際して，労働力の結集は血縁関係を基軸とした出自集団という同族を基軸としてなされたと理解するのが合理的である。

中里遺跡からは土偶形容器が出土しているが，これは中屋敷遺跡など結集以前の集落からの伝統を引いた呪術的象徴的遺物であり，前段階の集落との間の系譜的連続性は，こうした点にもうかがうことができる。

大型掘立柱建物の性格をめぐる そこで意味をもってくるのが，住居群の真中に設置された独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物である。小林青樹が指摘するように⁽¹⁸⁾，これは弥生再葬墓を造営した集団が低地に結集したときに居住域に設けた，弥生再葬墓と同じ性格，すなわち集団統合のシンボリックな建造物であろう [小林 2003 : 69～70 頁]。小林は，再葬墓の祖先祭祀的性格が，掘立柱建物の集団祭祀に引き継がれたとしている。関東地方では，環壕集落の中に大型の方形周溝墓が営まれる例がいくつかあり，独立棟持柱をもつ掘立柱建物が方形周溝墓の上に築かれた例もある (図 18)。こうした諸例からすれば，中里遺跡の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物は，出自集団のシンボルである祖先祭祀の性格をもっており，弥生再葬墓と類似した性格を維持していたと言える。再葬墓を祀る分散化した小集落が灌漑農業という労働力結集のために集合し，統合のシンボルを集落の真中に再葬墓から大型建物の形を変えて配置した，という形成のメカニズムについては小林説が支持できる⁽¹⁹⁾のである。

先に検討したように，縄文後・晩期には，共同の作業場や猟場，貝採集場に複数の集落から人々が集合して共同作業を行う機会が多かった。そしてそれが円滑になされている背景は，中核集落と周辺集落の関係が出自集団を基軸とした親族関係だったと考えればもっともよく理解できる。晩期終末の集落は施設が不明瞭だが，このような前段階の居住形態が維持されていたとすれば，水田稲作のための結集も上にみたような縄文時代の集団編成原理に基づいて，比較的スムーズになされたと推定できる。

第2節 関東地方における本格的農耕集落形成の一、二の事例

池上・小敷田遺跡の集落 中里遺跡のような弥生中期中葉の本格的な水田稲作集落は，関東地方で他にもいくつか知られている。池上・小敷田遺跡は埼玉県行田市と熊谷市にまたがる妻沼低地に形成された沖積微高地上の遺跡である [中島ほか 1984]。池上・池上西地区は弥生中期中葉，池上式期のほぼ単純な時期の集落であり，環壕3条，堅穴住居跡 11 棟，土坑 36 基が発掘された。壕はいずれも直線的であり，集落を囲むいわゆる環壕になるか否かは疑問なしとしないが，溝の一つは堅穴住居跡と主軸方向が一致していることからそれに伴う可能性は高い。堅穴住居の形態は中里遺跡と同じく整った隅丸長方形である。土坑からは土器や石器などが出土し，貯蔵穴あるいは使用後に廃棄物を捨てた施設ないし土坑墓と考えられ，再葬墓ではない。池上西地区の小敷田1地区から，やや新しい時期の方形周溝墓が3基，連結して検出された。

その後おこなわれた小敷田地区の調査は，小敷田1地区の南に細長く延長したトレンチの発掘に

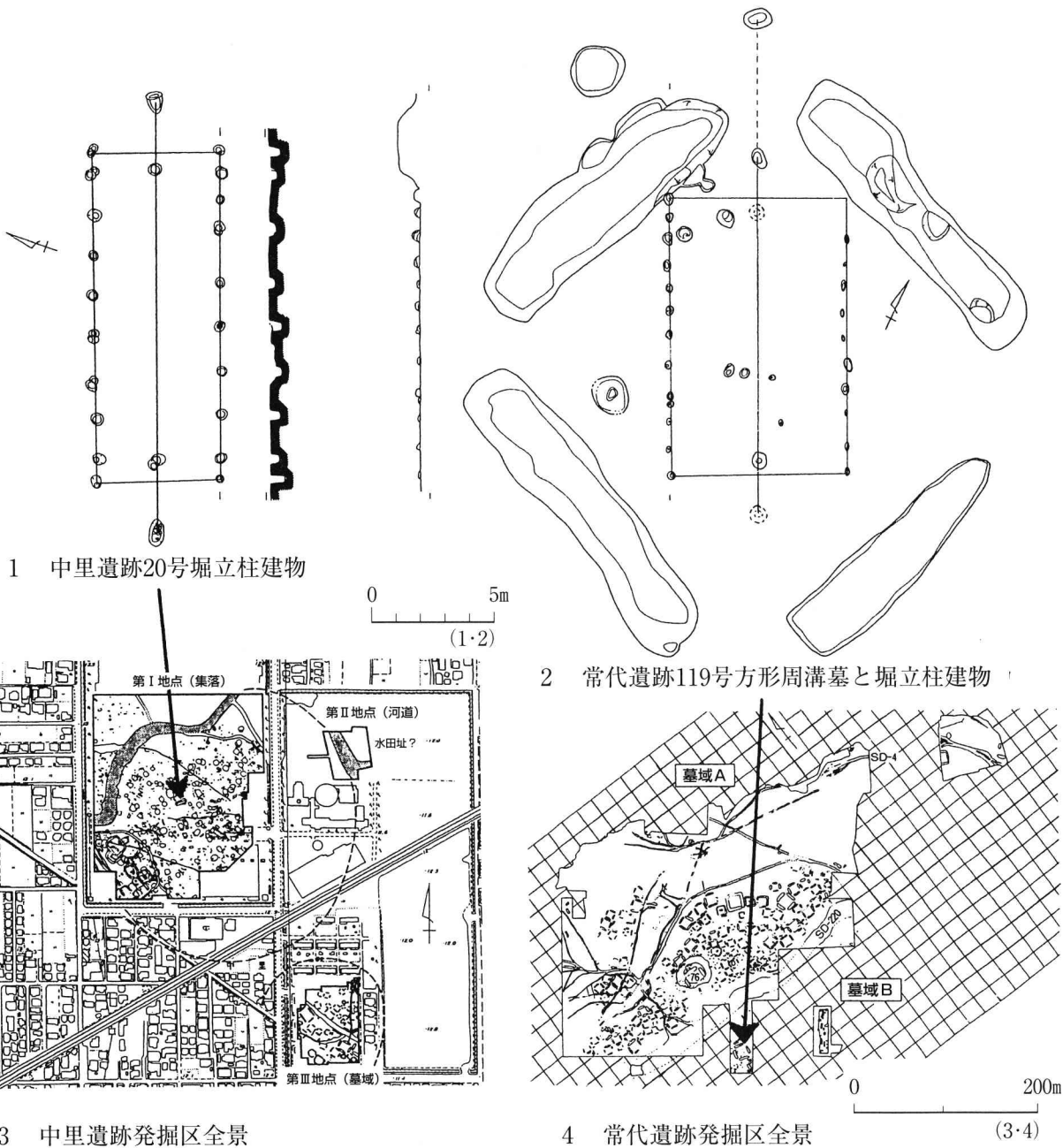


図18 独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物と大型方形周溝墓（弥生Ⅲ～Ⅳ期）

よるが、竪穴住居 17 棟、土坑 130 基、溝 2 条、方形周溝墓 4 基が出土した[吉田ほか 1991]。池上・小敷田遺跡の集落形成過程を分析した石川日出志によると、集落は蛇行する河川によって南北に分かれ、その間にはおよそ 100 m の距離があるが、そこは遺構空白地帯の微低地となっている。石川は詳細な土器の編年により、集落の形成と展開をおよそ 3 期に分けた [石川 2001 : 80 ~ 84 頁]。そのうち古段階の遺構は、北集落の池上地区で 1 号溝と竪穴住居及び小敷田 2 区の竪穴住居が、新段階の遺構はそれらが継続する他に、小敷田 1 区、3 ~ 5 区に新たに竪穴住居が出現する。そして

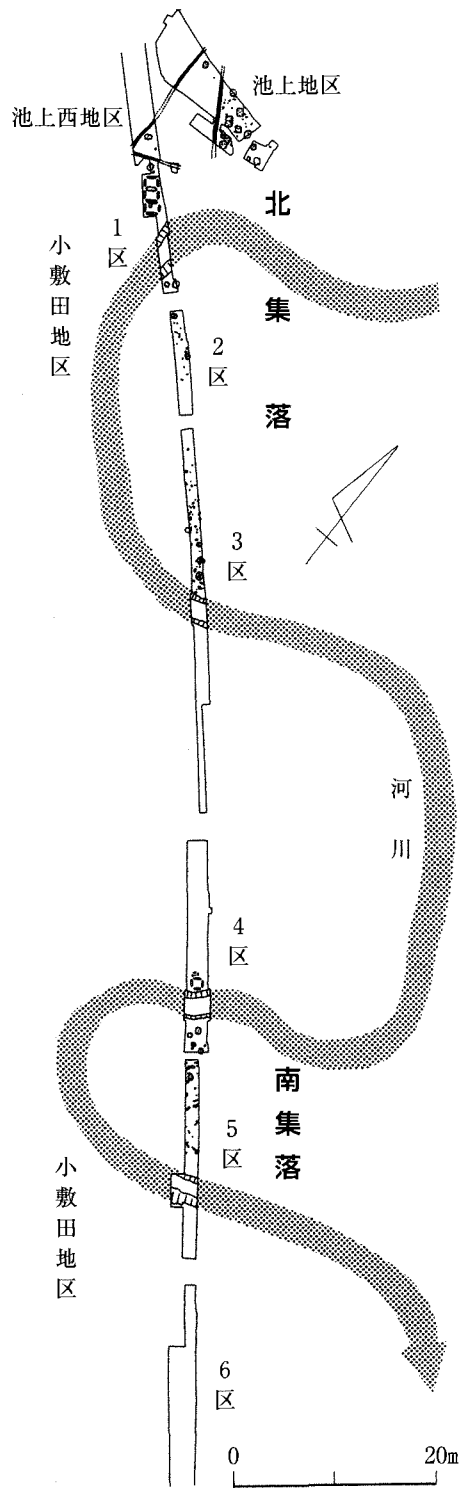


図19 埼玉県池上・小敷田遺跡の集落
(弥生Ⅲ期)

その後小敷田1区に方形周溝墓が築かれる、とされた。北集落が形成された後南集落が出現し、両者が併存したと復元したのである(図19)。

ここで注目したいのは、池上地区および小敷田1区と2区である。ともに北集落に存在しているものの、小敷田1区と2区の間には河川が走り、さらに池上地区と小敷田2区のそれぞれに100m以上隔てて竪穴住居が集中するので、居住域は少なくとも2群に分かれて形成が開始された可能性が指摘できる⁽²⁰⁾。

北集落と南集落の間地点は微低地になっており、イネのプラントオパール⁽²⁰⁾の存在から、この付近に水田が経営されていたとされている。また、竪穴住居跡の覆土から炭化米が出土した。磨製石器に大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器が認められ、水田で使われる木製農具を生産していた可能性も考えられる。一方、打製土掘具とそれに伴う横刃形石器が卓越しており、それ以前に台地を中心に使われた農具が低地でも用いられている点に特色がある。土偶形容器が1点検出されているところにも、伝統の継承がうかがえる。

掘立柱建物跡はないが、その後調査された熊谷市北島遺跡からは池上・小敷田遺跡に後続する時期の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡が検出されているので、池上・小敷田遺跡にも同様な掘立柱建物が存在した可能性は否定できない。したがって、池上・小敷田遺跡の遺構は環壕などの点で中里遺跡と微妙な差はあるがほぼ同じ内容をもつと見てよく、規模の大きな水田稲作農耕集落といえることができる。相違点も多々あろうが、ここでは中里遺跡との共通点に注目して、池上・小敷田遺跡の形成要因について考えてみたい。

池上・小敷田遺跡出現の背景 荒川扇状地周辺では、池上・小敷田以前の遺跡として、深谷市四十坂遺跡、深谷市上敷免遺跡、熊谷市横間栗遺跡、熊谷市三ヶ尻上古遺跡などが知られているが、いずれも小規模な弥生再葬墓遺跡であり、熊谷市飯塚遺跡など池上・小敷田遺跡とほぼ同じ時期の遺跡もあるが、ほとんどがそこまで継続しない。また、いずれも池上・小敷田遺跡

よりも上流にあり、扇状地周辺の微高地上や台地末端にあたる(図20・表6)。池上・小敷田遺跡は、それ以前の集落が立地しなかった、平野の真中により近い微高地に、弥生中期中葉に突如現れた集落である。そうした点は、中里遺跡と共通性をもつ。

池上・小敷田遺跡が複数の住居跡群から成り立っている点と、周辺集落の立地と時期の問題を重ね合わせると、中里遺跡と同じく周辺の小集落がいくつか集まって池上・小敷田に集落を形成した可能性が浮かび上がってくる。さらに池上・小敷田遺跡では大型の土偶形容器が1点だけ出土しているが、それ以前の四十坂遺跡からも出土している。このことは中屋敷-中里と同じく、近隣集落との間に伝統的な文化の継承を通じた系譜的なつながりのあったことがうかがえる。中期中葉以前には、微高地に立地した遺跡があり、あるいは水田稲作が早くから営まれていたかもしれない。ただ、池上・小敷田遺跡の規模は中里遺跡と同じくそれ以前とは比べ物にならないことも事実であり、立地条件からすれば、より生産性が高い、そのかわりに沖積微高地の真中に水田域をつくるという大規模な協業を必要とする、中里遺跡と同じテーマをもった集団編成がおこなわれたと考えるのである。

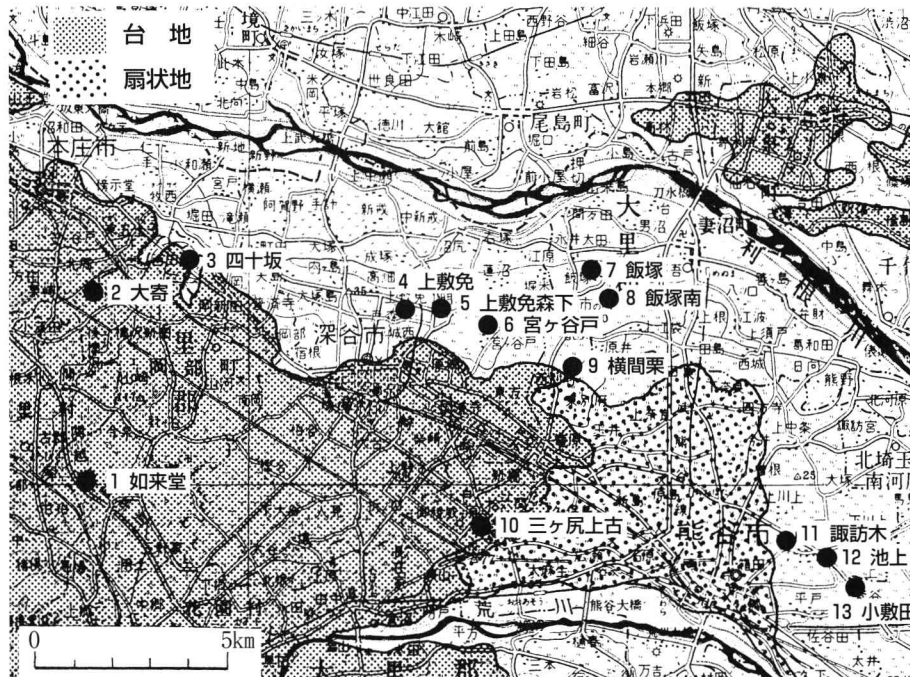
中里遺跡と大崎台遺跡との類似性 いくつかの小集団が結合して農耕集落を形成するのは、中里遺跡に限られたものではないことを論じた。先に中里遺跡はいくつかの環状の住居小群が集合した集落であることを推定したが、このような農耕集落の形状や形成過程は、ひとり中里遺跡に認められるだけなのだろうか。房総半島にある千葉県佐倉市大崎台遺跡を例にとって考えてみたい。

大崎台遺跡は、中期後葉宮ノ台式期の前葉から営まれた環壕集落である。小倉淳一は堅穴住居跡の出土土器を分析し、遺構の重複関係から3つの時期を抽出し、重複関係にはないものの、それらよりも古い一群を加えて4期に細分した〔小倉1993:147～149頁〕。その後、小倉は房総地方の宮ノ台式土器を再検討した結果、これまでの4期区分のうちの2・3期は文様要素としては区別できないことからまとめて2期とし、2・3期をⅡa、Ⅱb期と細別した〔小倉1996:57～60頁〕。さらに従来4期に入れていた270号住居跡出土土器の特徴、すなわち羽状縄文の形成をⅡb期の新段階に編入した。

黒沢浩は小倉が除外した櫛描文も含め、小倉と同様遺構の重複関係を主眼として大崎台遺跡の土器を編年し、櫛描文Aと縄文Aという古い要素をとにもつ土器群が、それをもたない土器群と以降の重複関係においても分別され、大きく二つの時期に分かれることをとらえ、それが各3小期に分かれ、それぞれの最古と最新は同時期であることから、全体を5期に細別した〔黒沢1997:38～41頁〕。小倉編年とは段階設定など細部において相違はあるものの、その序列についてそれほど大きな違いはない⁽²¹⁾。また、黒沢の住居単位の編年案は、安藤広道の大崎台遺跡5細別〔安藤1996〕とほぼ一致している⁽²¹⁾ので、三者の考えに大きな開きはない(表7)。

図21-1は大崎台遺跡の宮ノ台式期の遺構を抽出した図面だが、堅穴住居跡がいくつかの小群から構成されていることがわかる。視覚的には四つの小群に分けることが可能であり、それは重複しながら並ぶ部分と空間部分のコントラストによる。図21-2はこれらの堅穴住居跡を、時期の推定されている住居跡に限って、黒沢案を主体に時期別に色分けしたが、それぞれの小群には古い時期から新しい時期の住居跡までのあることがわかる。本稿で問題とする開設当初の1期の堅穴住居跡は、A群とD群に認められるが、B群の堅穴住居覆土中の土器にも1期ないし2期の破片が散

表6 妻沼低地帯周辺の弥生時代遺跡の変遷



	I期	II期古	II期新	III期古	III期新
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					

(番号は左図に対応、セルの濃色は主体となる時期)

図20 埼玉県妻沼低地帯周辺の弥生前～中期遺跡分布

見され、時期が決定できない堅穴住居跡の中に、1期の例が含まれている可能性が考えられる〔佐倉市大崎台B地区遺跡調査会1986〕。

したがって、大崎台遺跡の集落は、いくつかの小集団が集合したり遅れて参加したりして形成された可能性が高いといえよう。小群のいくつかは中央に空間をもち、環状に構成されているようにみえるが、このあり方は中里遺跡と共通している。大崎台遺跡は宮ノ台式期でも古い時期の集落ではない。周辺の調査が進んでいないので推測するしかないが、結合した小集団は宮ノ台式期の古い段階あるいは大崎台遺跡の1～2期における近隣集落であったろう。結合の契機にしても、灌漑農耕のためなのか、2期に掘られる環壕から想定されるように何らかの社会的な緊張状態を背景としたものなのか決定するのは困難だが、弥生中期後葉にいたってもなお中期中葉と同じような集団編成があったのであり、逆にそれは先に推測した中里集落の形成がたんにそれだけに終わるものでなかったことを暗示している。

単位集団をめぐって 本格的農耕集落が小集団の集合によって成り立っているという議論についていうと、たとえば甲元真之は東日本の農耕集落の展開を歴史的に展望するなかで、東日本に大規模な集落が形成される時期は、いずれも開拓が進む時期とほぼ一致し、弥生時代のそれは環壕集落の形成という東日本への農耕民の進出の時期であり、開拓時において単位集団が集合した集落であると考えている〔甲元1986：117頁〕。武井則道も、神奈川県横浜市大塚遺跡などの環壕集落を防塞集落と位置づけ、その中がいくつかの居住域によって成り立っていることを、戦時もしくは戦争状態に面した時に小集落の形で分散していた単位集団が結集した結果、と考えた〔武井1986：214頁〕。

甲元が言うように環壕集落の形成目的が非農耕民集落との対峙を表現するための手段であったか否かはさておき、横浜市三殿台遺跡や同市朝光寺原遺跡などが内部に小グループを包括する大規模

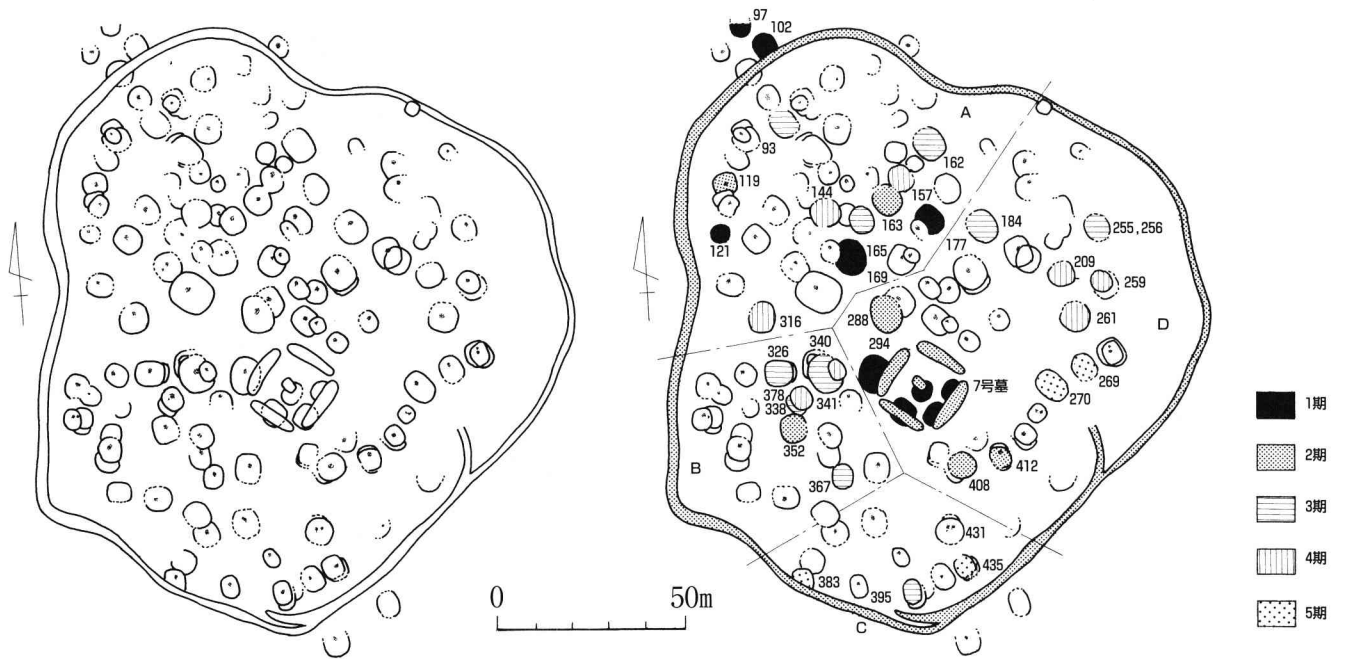


図 21 千葉県大崎台遺跡の環濠集落 (弥生Ⅳ期)

表 7 千葉県大崎台遺跡出土竪穴住居跡の時期

住居 NO.	区域	小倉 1993 編年()は 1996	安藤 1996 編年	黒沢 1997 編年
93	A			3期
97	A	1期		1期
102	A	1期		1期
119	A	2期		
121	A			1期
144	A	3期 (Ⅱ b 期古)	4期	4期
157	A			4期
162	A	3期		3期
163	A	1期		2期
165	A			3期
169	A	1期 (Ⅰ期)	1期	1期
177	A	(Ⅰ期)	1期	1期
184	D	3期		3期
209	D	4期		4期
253	D	4期		
255	D	2期		3期
256	D	3期		
259	D			4期
261	D	4期		4期
269	D	3期	5期	5期
270	D	4期 (Ⅱ b 期新)	5期	5期
288	D	2期 (Ⅱ a 期新)	2期	2期
294	D			1期
316	A			4期
326	B	3期		3期
338	B	3期		3期
340	B	2期 (Ⅱ a 期古)	3期	3期
341	B	4期		4期
352	B			2期
367	B			3期
378	B	3期		4期
383	C			5期
395	C			3期
408	D		3期	2期
412	D	2期		
431	C	4期 (Ⅲ期)	5期	5期
435	C	2期 (Ⅱ a 期古)	4期	4期

な集落であったことは、田中義昭らによって早くから説かれていたことである〔田中1976：45頁〕。そして、それは和島誠一や鏡山猛によって注意された集落における数棟の竪穴住居などのまとまりにもとづく原始集落構成論〔和島1948、鏡山1956〕や近藤義郎によって唱えられた単位集団論に依拠する説であった。

近藤は、岡山県津山市沼遺跡をとりあげて、周溝に囲まれた作業場ないし物置とみられる建物を中央に、倉庫と思われる高床建物を周溝の外側に伴う5棟の竪穴住居からなる小集団が、谷水田の基本的経営単位となりうる生産と消費の単位であり、共同体を構成する一つの単位集団であること、そして沖積平地を開拓するような場合には単位集団が一つの集合体という形をとり、いわば結集して生産単位集団となっていることを、福岡市比恵遺跡や静岡市登呂遺跡の例から論じた〔近藤1959：14～16頁〕。そして沼遺跡の経営単位の実態を近親集団と捉え、灌漑農耕のような多大の人力を要する場合に結集したのがいくつかの近親集団だったと考えた〔前出：18頁〕。

都出比呂志は、農耕民と採集狩猟民とを問わず、数棟を単位とする住居の集合体が時代や地域を超えて存在していることを重視する〔都出1989：458頁〕。そして縄文時代の小集団との関係性については不明確であるとしながらも、水稻農耕の開始期にこうした小集団が農業経営の基礎単位となったことは疑いないとして、近藤のいう単位集団はいくつかの世帯を含んだ血縁関係の強い農業経営の基礎単位である「世帯共同体」である、と具体化し〔都出1970：41～42頁〕、世帯共同体的な集団が耕地の占有や集団再生産の上で重要な単位となっていたことを指摘した〔都出1989：461頁〕。田中は環壕集落にみられるこのような小集団を、一集落内部において小グループが分化していった発展過程の結果として捉えたのだが〔田中1976：56頁〕、はたしてそれだけで説明できるであろうか。問題は、近藤がいくつかの近親集団の結集とした、その契機であり、都出が課題とした縄文時代の集団との関係性である。

本稿では縄文晩期～弥生時代中期前半の集落から中期中葉の農耕集落が形成されるまでの過程を、中里遺跡などの成立を介して、畠作依存の伝統的分散居住小集団が灌漑水田稲作をめざして結合した結果ととらえた。両者をつなぐ資料が充分出揃っているわけではもちろんないが、ある程度の理解は得られたと思われる。中里遺跡の竪穴住居小群が日常の消費単位であるとするれば、それは近藤のいう「単位集団」に近いものであろう。近藤は、場合によってはこうした消費・経営の単位がいくつか集まって水田経営などの生産の単位となっていたとするが、まさに中里遺跡はそうした構造を一つの集落で体現した集合体といえよう。こうした結合の過程で、大きな役割を果たしたのは西日本系の文化であるが、それを受け入れた在来の文化基盤という両者の観点からこの展開を問題にシなくてはならない。

⑤……………関東地方における本格的農耕集落形成の特質

第1節 在来文化の伝統と外来系集団の関与

土偶形容器と大型掘立柱建物のもつ意味 第①～③章で、弥生前期から中期前葉における台地上の小規模集落を検討し、農耕形態に規定された移動性の強い小集団によって営まれた集落であるこ

とを論じた。前章では中期中葉に平野の微高地に忽然と大規模な農耕集落が出現するが、それはそれ以前の小規模集落が集合した集落の可能性を考えた。この二者の系譜的なつながりを証明するには、主体をなす土器型式の連続性をあげるだけでも充分であろうが、しばしば述べてきたように、土偶形容器がそれを考えるうえで大きな意味をもつ。それは、土偶形容器の性格とも深くかかわっている。まずはそれについて、述べていくことにしよう。

土偶形容器は、土偶から変化した蔵骨器である。神奈川県中屋敷遺跡例のように、初生児の骨と歯が納められていたことからすれば、再葬に関わることは明らかである。関東地方では弥生前期に再葬が一般的な葬法になり、縄文晩期終末から土偶が葬制に関与していった流れのなかで、土偶形容器が成立したのである。土偶には、集団全体に関わる特別なものと個別的な用途のものがあることが指摘されている〔林 1976 : 187 頁〕。土偶形容器は大型で、限られた遺跡から多くても 2～3 個体しか出土しないことからすれば、前者の性格をもっている。再葬墓が近隣の小集落が集まっておこなう共同葬儀の場であったという理解からすれば、土偶形容器はさらに大きな地域集団のシンボルの意味をもっていたことは疑いない。

中里遺跡や池上遺跡から、土偶形容器が 1 個体だけ出土している。それぞれの集落成立以前の中屋敷遺跡や四十坂遺跡の土偶形容器の系譜を引いている。灌漑農耕を目的に新たな集団関係を結ぶ際、精神的なよりどころはそれまでの再葬墓に象徴される結合の紐帯に求めていたことをうかがわせる。土偶形容器は初生児の骨を納めているので、再生を念じた容器の可能性もあるが、当時の再葬の一般的な性格を考えれば、祖先祭祀の役割〔設楽 2004b〕をもっていた可能性が高い。土偶形容器を通じて、再葬墓に顕著だった祖先祭祀が集落にもち込まれていたこともありうる。

中里遺跡の居住小集団の中心に立てられた独立棟持柱をもつ掘立柱建物がそうした祖先祭祀の象徴的な建物として新たに登場した可能性が高いことは、すでに指摘したとおりである。この建物は近畿地方から導入された文化要素である一方、その性格は縄文文化の系譜を引いている。中里の集落が西日本からの一方的な関与のもとにできあがったものではないというばかりではなく、構成員の結びつきの根幹に関わる祭祀の本質が、それ以前の人々の結びつきを土台にしていたことは、あらためて注目したい点である。

農耕集落形成における外来系集団の役割 居住域と墓域を明確に区分してそれぞれ群集させる集落設計方法は、弥生文化成立当初以来の東海地方以西における弥生集落の基本であった〔甲元 1986 : 84 頁〕。在来の文化や集団が本格的な農耕集落の基盤となっていたことは先に述べたところでありそれもまた評価されなくてはならないが、人口増加を促した新たな生業体系である本格的な灌漑農耕の技術をはじめ、集落設計など隅々にまで近畿地方や東海西部の影響が及んでいたこともまた、高く評価しなくてはならない。

外来系の土器の主体を占める近畿系の土器は壺や甕、高杯などからなる。遠隔地の土器が持ち運ばれるときには壺などの飾られたものが中心になることが多いが、中里遺跡の場合はそれとは趣をことにする。都出比呂志による土器の移動の類型にもとづけば、土器を携えた集団移住が考えられる〔都出 1983 : 253～254 頁〕。地元の土器との胎土の差もそれを補強している。近畿系の集団の関与はこの地にとどまらず、同じ時期の千葉県常代遺跡などにも及んでいる。しかし、その後を引き続いて認められる外来系集団は西遠江など東海系集団であり、近畿系集団の関与は続かない。こう

した一過性のあり方は、その時期に限って近畿地方で移住を促すような出来事があったと考えるか、そうでなければ関東地方の集団の働きかけによって招聘された可能性が考えられよう。今後の課題である。

中期中葉から後葉の南関東地方には西日本系外来集団の影響のほかに、東北地方からの外来集団の影響が認められる。神奈川県逗子市池子遺跡は中期後葉の農耕集落であるが、漁撈具や魚骨が出土し、漁撈活動も展開していたことが確かめられている。魚類はサメ類とカツオなど大型魚類に特化し、それを捕獲した燕形銚頭も出土している。樋泉岳二は、漁撈具が遺跡の中の偏った場所から出土することに加えて、漁撈活動の季節性や専門性から、農耕集落に寄留した専門的漁撈民の存在を考えている〔樋泉 1999a：336頁〕。さらにその南の三浦半島海蝕洞窟には、外洋性の漁撈に特化した池子遺跡の漁撈民とよく似た性格をもつ漁撈集団が存在している。そこではアワビ採りや製塩活動もおこなわれており、燕形銚頭と合わせて、仙台湾やいわき沿岸の弥生時代漁撈文化の影響が強くなる〔設楽 2005a：317頁〕。このように、南関東地方の本格的農耕集落の形成には、北方系漁撈民も関与していた。西日本からばかりではない文化の多様な動きのなかで、多様な生業活動と労働集団の編成が進行していたことは、注目に値する。

第2節 他地方における本格的農耕集落形成過程との比較

東北地方との比較 東北部では、弥生前・中期に縄文晩期よりも大型の住居跡が一般化し、拡張の頻度も高くなり、住居内に居住していた人々の居住単位も数を増した。高瀬克範は住居の拡張に伴う居住単位の増加を「世帯の統合」の結果と考えた〔高瀬 2004b：162～163頁〕。秋田市地藏田B遺跡はそうした大型堅穴住居複数からなる、規模、人口の多い集落であり、堅穴住居の構造分析から、内陸からの移住者集団と在来の集団が統合した「集落の統合」の結果であるとも論じた〔高瀬 2000：24頁〕。こうした集落再編成の要因は、水田稲作の導入における労働力の集中化である〔高瀬 2000：27頁〕。

高瀬はさらに仙台・名取平野でも同様の分析をおこなった。その結果によれば、縄文時代から弥生時代の平野部の集落は、標高の高いところから低いところへ推移する傾向が認められ、弥生時代には相対的に標高の低い平野部に集落が激増するが、その中には広大な水田域や多量の木製農具をもつ集落が存在している。さらにその周辺地域で縄文から弥生時代にかけての集落が減少していることから、平野部での集落の激増は移住による短期的な居住の累積ではなく、他地域からの人の移動や集住化を考えないと説明できない、との結論に達した〔高瀬 2005：258頁〕。

津軽平野の岩木川流域でも、標高の高い地域から低地への集中化が進み、弥生中期中葉に浅瀬石川流域にもっとも集中的な居住がおこなわれていることからすると〔高瀬 2005：258頁〕、低地における農耕集落の形成に伴う集住化は、東北地方の弥生中期において水田稲作農耕が大規模に展開する平野部では、普遍的な現象であったようである。

関東地方では、一つの堅穴住居に複数の世帯が居住するような統合の仕方は明らかではないが、荒川扇状地での居住集団の動きや中里遺跡の集落動態と小集団結集の契機といった点に、東北地方の低地水田農耕集落の形成と合い通じるところがあるのは確かだろう。

大阪湾岸との比較 若林邦彦は河内湖南岸、東岸及びその南に展開する大阪平野の弥生中期中葉

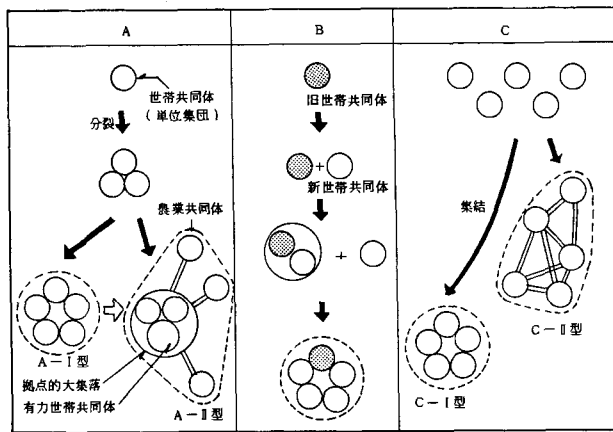


図 22 初期農業共同体の成立過程諸パターン

～後葉の集落群を分析し、かつて八尾市亀井遺跡や東大阪市瓜生堂遺跡などから捉えられてきた拠点集落は単一の構造体ではなく、基礎生活域・機能空間が複数結合した複合体のような状態であることを明らかにした [若林 2001: 43～46 頁]。

基礎生活域・機能空間とは酒井龍一が提唱した概念であり [酒井 1984]、前者が居住域で、後者が墓域や水田などの生産域である。大阪平野の基礎生活

域は、径 100～200 m 規模の居住域に 20～50 棟の住居からなることを、若林は横浜市大塚遺跡の環壕集落内住居数などから推測している。これは「単位集団」あるいは「世帯共同体」と呼ばれてきた集落形成の最小単位であるが、それらは数棟の住居からなるとされていたのとそぐわないことから「基礎集団」と呼び、若林は単位集団論に異論を差し挟んだ。さらに、こうした基礎集団が寄り集まった集落として「複合型集落」を提唱した。複合型集落モデルは大阪平野の低湿地に存在する多くの拠点集落ばかりでなく、奈良県唐古・鍵遺跡もその可能性があり、さらに北部九州から伊勢湾に至る西日本一帯で確認できるという [若林 2001: 49 頁]。

これは、中里集落の形成を理解するうえで重要なモデルである (図 22)。つまり、中里集落も単一の集団で成り立っていたのではなく、いくつかの基礎単位が居住域、墓ともに抽出できるからである。しかし、その内容には違いもある。若林のいう基礎集団は、単純化すれば居住域と墓域・水田域のセットの集合体で、それぞれが独立して至近距離に群在しているあり方を示しているのに対して、中里のそれはそれぞれが結合して一つの群をなしている。これは、大塚・歳勝土遺跡もそうであれば、大崎台遺跡にも当てはまる。本稿では、この小集団の出自を前段階の分散化した小集団に求めたのだが、それこそが単位集団にあたるものではないだろうか。

森岡秀人は集落選地の基礎的かつ最小の単位は数棟からなる世帯群＝世帯共同体であり、実態としても同時併存棟が 5 世帯ほどの集落構成は比較的多く認められるので、若林の基礎単位は世帯共同体の膨張あるいは集合の可能性がないのか検討を要するとしている [森岡 1999b: 121 頁]。もしそうであれば、さらに基礎集団がいくつか集合することに、大阪平野における弥生集落の何らかの特殊事情も考えなくてはならなくなる。若林は基礎集団が単位集団の複合体なのか、という問題は集落分析からは結論に至るのは困難だとするが、大塚・歳勝土遺跡や大崎台遺跡、あるいは中里遺跡の分析で試みたように、居住域や墓域の構成からそれに迫ることは可能なはずである。そして、すでに近藤は単位集団にも沼遺跡のように 4、5 棟の住居からなるものと、登呂遺跡や比恵遺跡のようにそれらがいくつか集合するものとあることを指摘しているのである [近藤 1959: 16 頁]。

いずれにしても、水田稲作など、大規模な共同作業を必要とする労働をおこなうため、あるいは基礎集団ごとに分割された労働による生産物の交換を円滑にするために、単位集団あるいは基礎集団が集合する一つの要因があったことは推測可能である。森岡秀人は「近畿中央部の場合、中期に

も存続して大環濠集落として拠点化が進むケースが見受けられるが、多くは前期環濠集落の近接地間での集団化、結集化を前提と」すると述べ〔森岡 1999a：107 頁〕、菅榮太郎も前期～中期へと集落の統合・集住が起り大規模集落が形成されたとする〔菅 1999：164 頁〕。

中期以降の近畿中央部で推進されたこのような集落の統合の方法が関東地方にもたらされ、中里集落の形成につながったのだろう。単位集団の結集という集団編成の方法や、それによってどのように各種の労働や集落での生活を運営していくのかという生活技術もそれに学んだ可能性が高いのである。⁽²⁴⁾

⑥……………結論

関東地方において、本格的な農耕集落が出現するまでの過程を2段階に分けて述べた。それを要約しながら結論を述べるとともに、派生する問題に対する展望を示す。

弥生中期中葉は本格的な低地における灌漑農耕の展開、大型農耕集落の形成、地域間交流の活性化という点で、東日本全域を巻き込んだ大きな社会変動期であった〔石川 2001〕。中里集落の形成は、まさにこの社会変動を象徴する現象である。

中里集落の成り立ちを細かく分析すると、きわめて興味深い事実が浮かび上がってくる。中里集落は一見西日本的要素から成り立っており、それが目立つ。それは事実なのだが、集落形成や道具などに、それまでに展開していた在地の弥生文化を特徴づける現象もいくつか指摘できる。①土器のおよそ95%が在地系の土器で構成される、②居住域はいくつかの住居群から成り立っているが、住居群は環状をなしている場合がある、③土偶形容器が用いられている、④石鋤が用いられていることなどである。さらに居住域の中心に位置する独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物の性格が、弥生再葬墓のそれを引き継いでいる可能性はきわめて濃厚である。

これら在来系の要素からすれば、西日本系の要素が卓越する見かけ上の様相とはまた別に、在来の人々の文化や社会のなかから中里集落が生まれてきた点に留意する必要がある。関東地方の弥生時代集落にはいくつかの小集団によって構成された集落があるが、それらの小集団は単位集団であって、環濠集落はそれが結集して形成されたことが早くから指摘されてきた。本稿では中里遺跡という関東地方最初期の大型農耕集落にすでにそうした結集が認められ、居住域を構成する小集団のいくつかが環状をなす特徴や、結集の原点である大型掘立柱建物に祖先祭祀的性格がうかがえることや土偶形容器の継承などから、それ以前の初期農耕集落が集合した可能性を考え、さらにその淵源は縄文後～晩期の分散化した小集団であるとの構想を示した。共生による人口増加などで周辺領域の資源枯渇が生じる危険を冒してまでもその道を選択し、それを支えたのが灌漑による農業の生産力であったことは疑いない。

このように、中里遺跡という本格的農耕集落の出自は、祖先祭祀的性格の強い弥生再葬墓によって結びついた同族－血縁集団である初期農耕集落の小集団に求められる。このことはすなわち、単位集団及びその集合に近親集団を想定した近藤義郎の論理を、関東地方の事例を素材に再確認する結果となった。南関東地方の農耕集落の場合は、この単位集団が縄文時代の系譜を引いた小集団である、というのが本稿の結論である。

水田稲作という技術的な関与はもちろんのこと、それを遂行するための集団編成のありかたや、それに伴う集落設計など近畿系集団の知識がうまく機能し、在来小集団の共生が円滑に進んだ背景には、中里集落出現以前、あるいは縄文時代にさかのぼる血縁関係を基軸とした居住原理の継承が考えられる。ただし、この結論は南関東地方で得られた知見によるものであり、西日本などでこれが当てはまるか否かは別に検討が必要であることは言うまでもない。単位集団論については、河内平野における事例から異論を提示する向きもあるが、近藤が立論に用いた岡山平野の事例やその後の議論に大きな役割を果たした南関東地方などの事例も加えて議論されることが望まれる。

同族小集団の集合によって弥生時代の規模の大きな集落が編成されていることは、大阪湾岸の弥生集落の分析から若林邦彦が提起した複合型集落と似たような状況といえる。中里集落にみられる西日本的農耕集落の諸特徴や近畿系の土器が複数の器種を伴って多数みられることからすれば、中里集落に近畿地方の人々が関与していることは明らかで、相似た状況が出現したのも合理的に理解できよう。

東北地方北部にも、初期農耕集落の形成に際してこのような集団の統合が認められ、それがやはり水田稲作の導入と深いかわりがあることは注目に値する。しかし、その内容は以下の2点で関東地方と異なる。第1に世帯の統合が認められる点であり、第2に東北地方北部における集団の統合は弥生Ⅰ期にさかのぼる現象で、関東地方のⅢ期との間にずれがある点である。前者については縄文晩期の亀ヶ岡文化に内在する居住原理などが作用していると思われるがよくわからない。それに対して、後者についてはある程度の見通し⁽²⁵⁾をもっているため、最後にそれを述べて本稿をとじた。

東北地方北部と関東地方の本格的農耕文化形成の時間的なずれの理由は、中部日本に内在する固有の条件と東北地方北部の固有性という二つの側面から考える必要がある。まず、中部日本におけるそれだが、①中部日本は縄文晩期に気候寒冷化の波がとくに強く襲い、それによって集落は衰退し人口は激減した。②縄文晩期後葉、西日本からの農耕文化が影響力を強めることになるが、中部日本は本格的農耕集団の文化である遠賀川文化のフロンティアに相当した。③その一方で東海地方には条痕文文化という内陸小集団を中心とする独自の文化が形成され、遠賀川文化に影響を受けつつもそれと一線を画したが、中部日本は広く条痕文系文化に包摂された。④したがって、こうした諸条件によって農耕文化の受容も、集団編成など社会的関係を組みかえることなく変化する方向をとることを余儀なくされた。

それに対して、縄文晩期の東北地方北部は亀ヶ岡文化が展開しており、周辺に多大な影響力を与えた文化の中心地であった。大洞 A₁ 式期という晩期の終末に、それまでの亀ヶ岡式土器の分布範囲をこえて北部九州、さらには奄美大島にまでその系統の土器がみられるようになるのは、水田稲作という生業を基軸として北部九州に出現した新たな文化に対する主体的情報収集に起因する現象であろう。その後の大洞 A' 式期あるいは砂沢式期すなわち弥生Ⅰ期に遠賀川系土器に類似する土器が壺、甕ともに多数認められ、水路を伴う水田も形成され、粉痕土器も多く認められるようになり、大陸系の管玉やガラス小玉も出現し、宮城県域では縦杵や環壕も現れる。

こうした西日本的農耕文化の要素は、東北地方北部が圧倒的に中部日本を凌駕しており、文化が西から徐々に伝わったのではないことを物語る。吸引力は農耕文化の側にあり、亀ヶ岡文化の土器

が北部九州へと引き寄せられたのだろうが、動いていったのは東北地方の側である。それに継起する東北地方への異文化、すなわち農耕文化の流入状況と、それが中部日本を飛び越して生じたことは、先にみた中部日本に内在する条件とともに、東北地方北部を中心に圧倒的影響力をもちえた亀ヶ岡文化の農耕文化という新たな文化に対する積極的な働きかけを示している。中部日本と比較した場合の西日本的農耕文化に対する温度差が、この二つの地方の間に、水田稲作をめぐる集団編成を含む新たな文化への取り組みのギャップをもたらしたのであろう。

(2005年11月15日稿了)

謝辞 本稿は、2005年5月15日に国立歴史民俗博物館で開かれた、共同研究『資料の高度歴史情報化と資料科学的総合研究』において、「関東地方における農耕集落の形成過程」と題して発表した内容にもとづく。この研究会を主宰する藤尾慎一郎氏をはじめ、研究会のメンバーである石黒立人、扇崎由、小沢佳憲、小林青樹、柴田昌児、濱田竜彦、安英樹、若林邦彦の諸氏にはさまざまなご助言などを賜った。また、石川日出志、井上慎也、太田保、河合英夫、倉田義広、小泉玲子、佐々木由香、高瀬克範、高橋龍三郎、谷口康浩、戸田哲也、中沢道彦、山下孝司、山本暉久、渡辺修一の諸氏にご教示を賜り、資料を提供していただいた。記して感謝申し上げたい。

註

- (1)——南奥地方から三河地方における初期弥生墓制を代表するのが再葬墓である。先史時代の再葬墓は洋の東西を問わず存在するが、上記の地域における弥生時代のそれは土坑に壺形土器を中心とする複数の蔵骨器を納めるのを特徴とする。これが弥生時代前半の東日本の墓制を特徴づけていることから、弥生再葬墓と呼称する。
- (2)——注連引原遺跡のかつての調査でも、不規則なピットは多数検出されており、なかには長方形の建物の存在を推定できそうなピット列もある。しかし、それは調査時の土層観察などをへて明らかにされるべきものであって、図上での復元に注意を要することはいうまでもない。
- (3)——阿部芳郎は竪穴住居や貯蔵穴などもつ遺跡を多機能ムラととらえて、それらをもたない遺跡と区別している。
- (4)——林謙作はアイヌが災害や気候変動など、悪化した生活条件のもとで移動・移住する時に、コタンの全世界帯で移住するのではなく、2～3世帯などいくつかの集団に分裂して別の土地に移動していることを、縄文時代の資源管理の手段としての移動を理解する重要な民俗的比較事例としている [林 2004b: 46～48 頁]。
- (5)——同族は文化人類学では「家を単位として共通の祖先をもつ本家分家の系譜関係によって結ばれた日本

の父系単系的な親族集団」を指すが [上野 1987]、一般的には「血族・部族などが同じであること」 [新村出編『広辞苑』] であるので、ここでは血縁関係にある集団を指す。縄文社会の集団関係は血縁関係による同族を基軸としていたことは、埋葬人骨の頭蓋形態小変異分析やDNA分析によって支持しうる。

(6)——一方、高橋龍三郎は草刈貝塚の環状集落の小群は、廃屋墓との関係から別々の先祖を祭る血縁関係にない世帯群であるとする。つまり、草刈貝塚はリネージュや出自を異にする複数世帯の地縁的結合体である、というのだ [高橋 2003: 103～106 頁]。そうであれば、分散する際に小群を単位とし、その後も分散化した集団が結びついてきたであろう背後に親族関係を想定したことと矛盾をきたす。しかし、「出自集団も氏族の単位で外婚集団として機能するため、集落は複数の出自集団で構成されるのが一般的」であるので、「個々の集落で経営をおこなういくつかの単位は氏族ではなく、その分節であり実質的な血縁系譜をもつ出自集団」 [田中 2004: 300 頁] とみたほうがよいだろう。居住集団から派生したり分散化したりした集団は、その母体集団とともに氏族に代表されるソダリティーという、居住集団を横断的に結びつける社会集団の一単位 [サーヴィス 1979: 11 頁] ととらえることができる。

(7)——縄文後期中葉の加曾利 B1 式期に出現する大型建物も、その機能を果たすものであったろう。阿部芳郎は、縄文後期中葉に東日本で出現する環状盛土遺構などを長期にわたる居住の結果と見なし、巨大スタジアムとする小林達雄らの説と鋭く対立している [阿部 2005 など]。阿部は綿密に計画され実行された発掘調査によって実証的にその反証材料をあげているだけに、たいへん説得力に富む。たしかに環状盛土遺構には長期にわたる営為の結果と見なすべき点は多々あるが、一方で大湯環状列石は居住集団の様相が不明確な点からすれば、やはり共同祭祀施設という性格が強うかがうことができるのであり、栃木県小山市寺野東遺跡の巨大な盛土遺構あるいは加曾利貝塚の環状貝塚も、築造後に近隣の人々、あるいは遠隔地から訪れた人々に視覚的に訴える力はかなり大きかったのも事実であろう。また、縄文時代の集落研究において、大規模にみえる集落も同時併存の住居棟数からすると、実際上の規模は再検討が必要だという見解がひとつの潮流を占めるにいたった。なかには環状集落の中央広場の存在も認めない意見もあるとされるように、ひとくくりにはできない多様な意見が内部にみられる。詳しくは、林謙作の整理 [林 2004b] を参照されたい。

(8)——ただしそれは別稿でまとめているので [設案 2005b]、ここではその後の新知見を加えながらも要約にとどめることをお断りしておく。

(9)——高瀬克範によれば、東北地方の横刃形石器よりも B タイプポリッシュの出現率が高いという。

(10)——弥生再葬墓分布域では、この時期の土器の表面にアワないしキビの種子と思われるような圧痕がしばしば観察されるが、山内清男が提起して丑野・中沢らが進める圧痕モデリングの顕微鏡観察が、この問題を解決する有効な手段になるだろう。

(11)——大工原豊の教示。

(12)——石鍬は埼玉県池上・池守遺跡といった弥生中期中葉の微高地上の遺跡で多量に出土しているように、水田稲作にも開墾具、耕起具として用いられた。したがって、弥生前・中期前葉のこの地方で水田稲作がまったくおこなわれていなかったというわけではもちろんない。様々な状況からして、大規模灌漑の度合いが低く、畠作に比重がおかれていたという、水田稲作への比重のかけ方の問題である。日本列島の初期農耕文化における農作物やそれに伴う農耕技術の選択肢の多様性を重視したい。この考えは、これまでの関東地方における弥生時代の畠作に対する評価に幅広い視点から疑問を提示する安藤広

道の見解 [安藤 2001 など] と抵触するが、安藤説に対する考えは、また稿を改めて述べることにしたい。

(13)——農耕自体は縄文文化にも認められるので、社会変革を遂げていないこうした文化は縄文文化と基本的に差がないのではないかとし、続 (エビ) 縄文という時代概念を設定する説 [林 1987] や、それに加えて東北地方北部では穀物栽培に特化した期間が短いことから弥生文化の範疇でとらえることを疑問視する説もある [藤尾 2000: 169 頁]。しかし述べてきたように、縄文文化からの変化は一部の文化要素の変化にとどまるのではなく、農耕文化を基軸に互いに緊密に関連しあった変化をおこなっている。すなわち変化の方向性が農耕文化に向かって収斂しているのであり、農耕文化複合とってよく [設案 2005b: 132 ~ 133 頁]、縄文文化の生業や社会に占める農耕の役割とは質的に異なっている。また、炭化米やアワの出土量も、縄文文化にはない飛躍的变化を遂げており、西日本の弥生文化の影響を受けずに独自に農耕化したとは考えられない。したがって、この文化は西日本の低地帯を中心に展開する大陸系文化要素とのかかわりが強い弥生文化とは性格の異なる、縄文系弥生文化という範疇でとらえるのが妥当であり、弥生文化の一形態とみなさないわけにはいかない [設案 2000]。

(14)——C. レンフリーューはブリテンのウェセックス地方新石器時代において、焼畑などをおこなう初期農耕集団は技術が未熟なので移動的な生活を営んでいるが、祖先の霊が集まる長形墳が集団の領域のシンボル-重要なモニュメント-として集団結集の機能を果たしていたと考えている [Renfrew 1973a・b]。関東地方初期農耕社会における農耕形態、集落、再葬墓の関係性を考えるモデルとして、比較検討に値する。

(15)——こうした住居と墓域の関係は、すでに都出比呂志が明らかにしているところである [都出 1989: 218 頁]。

(16)——石川日出志の教示。

(17)——ただし、この点については報告書がまだ出ていない段階で時期的な分析にもとづいて深く追究することはできないので、あくまで仮説として提示しておく。

(18)——前稿 [設案 2004a] で [小林 2003] からの引用を落としてしまった。ここで補訂し、小林青樹の先行研究であることを銘記しておきたい。

(19)——小林は独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物は縄文時代の系譜を引いたものであるという宮本長二郎の見解を支持して、中里集落のそれについても縄文系と考えている。たしかに青田遺跡など縄文晩期終末にこの建築方法は認められるが、関東地方では弥生Ⅲ期までの間に空

白があり、大型で集落の中央に位置する大阪府和泉市・和泉大津市池上曾根遺跡と同じようなありかたを示すことからすれば、建物の工法は縄文系といえるかもしれないが、やはり中里集落のそれは近畿地方から導入された建造物とみなすのが妥当だろう。

(20)——[設楽 2005b: 152 頁] で、北集落と南集落が形成当初から2群に分かれていたようなニュアンスのことを書いたが、石川の詳細な集落形成過程復元に照らして上述のように訂正する。ただし、形成当初から複数の住居跡群で形成されていたという主旨は変わらない。小敷田3～5区は人口増加などによる分岐集団であり、農耕などの生産力増加を背景とした結果であろう。

(21)——両者間で2細別時期以上の見解の相違があるのが、269号と435号住居であり、回転結節文や羽状縄文の登場の点において144号住居と270号住居の位置づけも違うなど、細部ではだいぶ異なっていることに留意しておきたい。

(22)——集落の経営期間の中で、人口増加などにより内部集団が分裂して小集団を増やしていく場合のあった

ことを否定するものではない。神奈川県三殿台遺跡では一つのグループが分化して複数のグループを形成したと考えられている[田中 1976: 39 頁]。

(23)——大崎台遺跡や神奈川県大塚遺跡に環壕集落が形成されたとき、はたして非農耕民が周辺にいたのであろうか。

(24)——若林は、秋山浩三が明らかにした複合型集落である大阪府池上曾根遺跡での生業集団のゆるやかな偏り[秋山 1999: 25 頁]や、愛媛県松山市文京遺跡での田崎博之の分析[田崎 1999]に注目し、基礎集団間で一定の機能分化が存在していたと解釈した[若林 2001: 49 頁]。すでに述べたように、池子遺跡という農耕集落の中に漁撈集団が編成され、一定の場所に居住していた可能性からすれば、東日本の農耕集落でもそうした編成が進行しており、そこにも近畿地方など西日本からの関与が想定できる。

(25)——2004年11月考古学研究会東京例会における発表。

参考文献

- 秋山浩三 1999a 「近畿における「神殿」「都市論」の行方」『ヒストリア』第163号, 1～30頁, 大阪歴史学会。
阿部芳郎 2003 「遺跡群と生業活動からみた縄文後期の地域社会」『縄文社会を探る』74～100頁, 学生社。
安藤広道 1996 「南関東地方(中期後半・後期)」『YAY! 弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』241～258頁, 弥生土器を語る会。
安藤広道 2001 「倭の地は温暖にして冬夏生菜を食い～倭人の食卓」『三国志がみた倭人たち 魏志倭人伝の考古学』131～151頁, 山川出版社。
石川日出志 1988 「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『(条痕文系土器)文化をめぐる諸問題-縄文から弥生- 資料編Ⅱ・研究編』117～124頁, 愛知考古学談話会。
石川日出志 1999 「東日本弥生墓制の特質」『新 弥生紀行』175～176頁, 朝日新聞社。
石川日出志 2000a 「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』739～760頁, 東京堂出版。
石川日出志 2000b 「弥生時代再葬墓造営過程の復元」平成9～11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。
石川日出志 2001 「関東地方弥生中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号, 57～93頁, 駿台史学会。
石川日出志 2003 「神保富士塚式の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号, 27～53頁, 土曜考古学研究会。
石川日出志 2005 「弥生時代再葬墓に近接する生活遺跡の試掘調査報告-新潟県阿賀野市山ノ下遺跡-」『考古学集刊』特別号, 17～33頁, 明治大学文学部。
井上慎也ほか 2003 「大上原地区遺跡群-団体営農業基盤整備促進事業大上原地区農道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」群馬県安中市教育委員会。
井上慎也ほか 2004 「中野谷地区遺跡群2-県営畑地帯総合整備事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県安中市教育委員会。
今村啓爾 1989 「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』61～94頁, 六興出版。
梅宮 茂・大竹憲治ほか 1986 『霊山根古屋遺跡の研究』霊山根古屋遺跡調査団。
上野和男 1987 「同族」『文化人類学事典』518頁, 弘文堂。
大島慎一 2000 「かながわの弥生文化からみた中里遺跡」『平成12年度小田原市遺跡調査発表会中里遺跡講演会発表要旨』7～12頁, 小田原市教育委員会。
小倉淳一 1993 「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学第20集記念論文集』135～152頁, 法政考古学会。

- 小倉淳一 1996「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号, 32～69頁, 史館同人。
- 小田原市教育委員会 2000『中里遺跡講演会～東日本弥生時代の幕開けを解明する～発表要旨』。
- 小野和之ほか 1993『神保富士塚遺跡』(『財』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告)第154集)群馬県教育委員会ほか。
- 鏡山 猛 1956「環溝住居小論(一)」『史淵』第67・68号輯, 1～26頁, 九州史学会。
- 金箱文夫 2003「低地の開発と縄文後・晩期の生業—大宮台地を中心に—」『縄文社会を探る』53～73頁, 学生社。
- 神沢勇一 1979「南関東地方弥生時代の葬制」『どるめん』23, 35～47頁, JICC出版。
- 黒沢 浩 1997「房総宮ノ台式土器考—房総における宮ノ台式土器の枠組み—」『史館』第29号, 20～66頁, 史館同人。
- 剣持輝久 1996「三浦半島南部の海食洞穴遺跡とその周辺の遺跡について」『考古論叢神奈川』第5集, 51～66頁, 神奈川県考古学会。
- 甲元真之 1986「農耕集落」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』77～125頁, 岩波書店。
- 小杉 康 1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓際制」の構造と機能—」『駿台史学』第93号, 101～149頁, 駿台史学会。
- 小林青樹 2003「縄文から弥生への祭祀と墓制の変容」『第4回大学合同考古学シンポジウム 縄文と弥生—多様な東アジア世界のなかで—予稿集』67～72頁, 大学合同考古学シンポジウム実行委員会。
- 小林青樹 2004「農耕開始期の居住システムと住居構造—中部高地・関東を中心に—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集, 243～259頁, 帝京大学山梨文化財研究所。
- 小林青樹 2005「縄文・弥生移行期における地域社会の変容過程—北関東の事例と遺跡動態の反復増減パターン—」『第4回考古学研究会東海例会 縄文晩期～弥生中期の地域社会の変容過程』24～38頁, 第4回考古学研究会東海例会事務局。
- 小林青樹・大工原豊・井上慎也 2003「群馬県安中市注連引原遺跡群における弥生時代前期集落の研究」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』45～48頁, 日本考古学協会。
- 小林達雄 1986「原始集落」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』37～75頁, 岩波書店。
- 近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻第1号, 13～20頁, 考古学研究会。
- 群馬県考古学談話会編 1983『第4回三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会。
- (財)かながわ考古学財団ほか 2000『公開セミナー 弥生時代の幕開け—縄文から弥生への移行期の様相を探る—記録集』。
- サーヴィス, E. (松園万亀雄訳) 1979『未開の社会組織』(『人類学ゼミナール』12) 弘文堂。
- 酒井龍一 1984「弥生中期・畿内社会の構造とセトルメント・システム」『奈良大学文化財学報』第3集, 37～51頁, 奈良大学文学部文化財学科。
- 桜井徳太郎 1974「柳田国男の祖先観・上」『季刊柳田国男研究』第7号。
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会編 1986『大崎台遺跡発掘調査報告』II。
- 佐々木由香 2005「中屋敷遺跡の自然科学分析の成果と意義」『神奈川県大井町中屋敷遺跡発掘調査成果の意義—南西関東における弥生文化の成立期の様相を探る—』第15回昭和女子大学文化史学会配布資料。
- 設案博己 1993「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集, 3～48頁, 国立歴史民俗博物館。
- 設案博己 1995「各地域での弥生時代の始まり 中部高地・関東—条痕文化の広がり」『弥生文化の成立 大変革の主体は「縄文人」だった』180～192頁, 角川書店。
- 設案博己 2000「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』第47巻第1号, 88～99頁, 考古学研究会。
- 設案博己 2004a「独立棟持柱をもつ大型独立柱建物の性格」『祭祀考古』第25号, 1～7頁, 祭祀考古学会。
- 設案博己 2004b「再葬の背景—縄文・弥生時代における環境変動との対応関係—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集, 357～380頁, 国立歴史民俗博物館。
- 設案博己 2005a「側面索孔燕形銚頭考—東日本弥生文化における生業集団編成のあり方をめぐって—」『海と考古学』299～330頁, 六一書房。
- 設案博己 2005b「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』(『先史日本を復元する』4) 101～150頁, 岩波書店。
- 菅榮太郎 1999「弥生時代環壕集落小論」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』(『同志社大学考古学シリーズ』VII) 159～170頁, 同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 大工原豊ほか 1987『注連引原遺跡』群馬県安中市教育委員会。
- 大工原豊ほか 1988『注連引原II遺跡—すみれヶ丘公園造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』安中市教育委員会。
- 高瀬克範 1999「東北弥生社会の住居と居住単位」『古代文化』第51巻第9号, 503～520頁, 古代学協会。
- 高瀬克範 2000「東北地方弥生前・中期の集落」『物質文化』68, 16～31頁, 物質文化研究会。
- 高瀬克範 2004a「中野谷原遺跡における弥生時代の石製収穫・除草具」『中野谷地区遺跡群2—県営畑地帯総合整備事業横野平

- 地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」163～166頁、群馬県安中市教育委員会。
- 高瀬克範 2004b『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房。
- 高瀬克範 2005「仙台平野とその周辺における占拠特性－縄文時代晩期と弥生時代の包蔵地群解析から－」『古代文化』第57巻第5号、251～260頁、古代学協会。
- 高橋龍三郎 2003「縄文後期社会の特質」『縄文社会を探る』101～137頁、学生社。
- 武井剛道 1986「弥生時代の南関東」『岩波講座日本考古学5 文化と地域性』187～222頁、岩波書店。
- 田崎博之 1999「愛媛県松山市文京遺跡」『古代学協会四国支部第13回大会資料 瀬戸内の弥生中期集落』古代学協会四国支部。
- 田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第22巻第3号、31～61頁、考古学研究会。
- 田中良之 2004「親族論からみた日本考古学」『文化の多様性と比較考古学』297～306頁、考古学研究会。
- 谷口康浩 2004「環状集落の成立過程－縄文時代前期における集団墓造営と拠点形成の意味－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集、179～206頁、帝京大学山梨文化財研究所。
- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社。
- 谷藤保彦ほか 1997「神保植松遺跡」(『財』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書)第214集)群馬県教育委員会ほか。
- 都出比呂志 1970「農業共同体と首長権－階級形成の日本的特質」『講座日本史1』29～66頁、東京大学出版会。
- 都出比呂志 1983「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻第4号、245～257頁、信濃史学会。
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店。
- 津南町教育委員会 2000「上原 A 遺跡」『津南町遺跡発掘調査概要報告書』。
- 樋泉岳二 1999a「池子遺跡 No.1 - A 地点における魚類遺体と弥生時代の漁撈活動」『池子遺跡群 X No.1 - A 地点』(『かながわ考古学財団調査報告』46) 311～343頁、かながわ考古学財団。
- 樋泉岳二 1999b「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集、289～310頁、国立歴史民俗博物館。
- 樋泉岳二 2003「貝塚からみた生業活動と縄文社会－動物資源利用から縄文後期下総台地の地域社会を探る－」『縄文社会を探る』20～52頁、学生社。
- 戸田哲也 1999「東日本弥生農耕成立期の集落」『季刊考古学』第67号、87～90頁、雄山閣出版。
- 鳥羽嘉彦ほか 1989「五輪堂遺跡－塩尻東地区県営圃場整備事業埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－」塩尻市教育委員会。
- 中川村教育委員会 2001「刈谷原遺跡 第2次確認調査報告書』。
- 中沢道彦・丑野毅 1998「レプリカ法による縄文時代晩期土器の粉状圧痕の観察」『縄文時代』第9号、1～28頁、縄文時代文化研究会。
- 中島 宏ほか 1984『池守・池上』埼玉県教育委員会。
- 林 謙作 1976「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』169～203頁、東出版寧楽社。
- 林 謙作 1977「縄文期の葬制－第Ⅱ部 遺体の配列、とくに頭位方向－」『考古学雑誌』第63巻第3号、211～246頁、日本考古学会。
- 林 謙作 1979「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号、1～16頁、考古学研究会。
- 林 謙作 1980「東日本縄文晩期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』第88巻第3号、269～284頁、日本人類学会。
- 林 謙作 1987「統縄紋のひろがり」『季刊考古学』第19号、55～57頁、雄山閣出版。
- 林 謙作 2004a『縄紋時代史Ⅰ 考古学選書』雄山閣出版。
- 林 謙作 2004b『縄紋時代史Ⅱ 考古学選書』雄山閣出版。
- 春成秀爾 1969「中・四国地方縄文時代晩期の歴史的位置」『考古学研究』第15巻第3号、19～34頁、考古学研究会。
- 春成秀爾 1980「縄文合葬論」『信濃』第32巻第4号、303～337頁、信濃史学会。
- 春成秀爾 1983「縄文社会論」『縄文文化の研究8 社会・文化』223～252頁、雄山閣出版。
- 春成秀爾 1986「弥生時代」『図説発掘が語る日本史第二巻 関東・甲信越編』115～156頁、新人物往来社。
- 春成秀爾 1988「埋葬の諸問題」『伊川津貝塚』(『渥美町埋蔵文化財調査報告書』4) 395～420頁、渥美町教育委員会。
- 春成秀爾 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集、47～91頁、国立歴史民俗博物館。
- 藤尾慎一郎 2000「弥生文化の範囲」『倭人をとりまく世界－2000年前の多様な暮らし』158～171頁、山川出版社。
- 藤田 等 1956「農業の開始と発展－特に石器の生産をめぐる問題－」『私たちの考古学』9、4～11頁、考古学研究会。
- 松島 透 1964「飯田地方における弥生時代打製石器－硬い粘土と石製農具－」『日本考古学の諸問題 考古学研究会十周年記念論文集』59～68頁、考古学研究会十周年記念論文集刊行会。
- 水野正好 1969「縄文時代集落復元への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号、1～21頁、古代学協会。
- 百瀬長秀 1994「浮線文期遺跡分布論」『中部高地の考古学Ⅳ 長野県考古学会30周年記念論文集』165～200頁、長野県考古学会。

- 森岡秀人 1999a 「弥生集落研究の新動向（Ⅰ）－小特集「瀬戸内東部地域」に寄せて－」『みずほ』第30号, 101～117頁, 大和弥生文化の会。
- 森岡秀人 1999 b 「弥生集落研究の新動向（Ⅱ）－小特集「大阪から紀伊水道地域」に寄せて－」『みずほ』第31号, 114～126頁, 大和弥生文化の会。
- 山田康弘 1995 「多数合葬例の意義－縄文時代の関東地方を中心に－」『考古学研究』第42巻第2号 52～67頁考古学研究会。
- 山本暉久・小泉玲子 2005 「中屋敷遺跡の発掘調査成果－弥生時代前期の炭化米と土坑群－」『日本考古学』135～147頁, 日本考古学協会。
- 吉田 稔ほか 1991 『小敷田遺跡』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第95集）埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 若狭 徹 2001 「中野谷・原遺跡」『安中市史 第4巻 原始古代中世編』348～351頁, 安中市教育委員会。
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価－大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に－」『日本考古学』第12号, 34～54頁, 日本考古学協会。
- 和島誠一 1948 「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』1～32頁, 学生書房。
- Renfrew, C., 1973a, Monuments, mobilization and social organization in Neolithic Wessex. *The Explanation of Culture Change*, pp.539-558. London.
- Renfrew, C., 1973b, *Before Civilization: The radiocarbon revolution and prehistoric Europe*. Jonathan Cape.

挿図・表出典

- 図1：井上ほか 2004－付図3
- 図2：井上ほか 2003－付図5
- 図3：設楽 2005b－130頁
- 図4：小野ほか 1993－33頁
- 図5：谷藤ほか 1997－518頁・528頁・付図3
- 図6：山本・小泉 2005－138・145頁
- 図7：鳥羽ほか 1989－12頁
- 図8：中川村教育委員会 2001－7頁
- 図9：設楽作成
- 図10：樋泉 2003－23頁
- 図11：金箱 2003－65頁
- 図12：樋泉 2003－29頁
- 図13：設楽博己 2005 「東日本初期弥生文化における伝統と変革」『平成17年春季特別展 東海の弥生フロンティア』（『大阪府立弥生文化博物館図録』31）66～73頁, 大阪府立弥生文化博物館－67頁
- 図14：設楽 2005b－131頁
- 図15：設楽 2005b－132頁, 関沢聡ほか 1987 『松本市赤木山遺跡群Ⅱ－緊急発掘調査報告書－』（『松本市文化財調査報告』47）松本市教育委員会ほか－115頁
- 図16：設楽 2005b－146頁
- 図17：設楽 2005b－150頁
- 図18：設楽 2004a－2頁
- 図19：石川 2001－81頁
- 図20：設楽作成
- 図21：柿沼修平ほか 1984 『大崎台遺跡発掘調査概報－大崎台遺跡 B 地区・C 地区－』佐倉市大崎台遺跡 B 地区遺跡調査会－佐倉市大崎台遺跡全測図を改変
- 図22：森岡 1999b－122頁
- 表1：設楽 2005b－116頁
- 表2：設楽作成
- 表3：設楽作成
- 表4：設楽作成
- 表5：樋泉 2003－31頁
- 表6：設楽作成

表7：小倉1993・1996，安藤1996，黒沢1997より

(駒澤大学，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2005年11月29日受理，2006年8月10日審査終了)

Process of the Formation of Farming Settlements in the Yayoi Period in the Kanto Region

SHITARA Hiromi

During the Yayoi period, farming settlements in the Kanto region were formed through two stages. The first stage occurred at the end of Early Yayoi. Farming settlements at this time were extremely small in size and consisted of several pit dwellings and pits. Settlements were configured in a circle, which suggests a tradition from the Jomon period. Even though from Middle Jomon large-scale settlements broke up and became small settlements on account of the cooling of the climate and other factors, we may assume that this tradition was passed on. What characterizes the culture of this time is the custom of reburial. Reburial served as a means of worshipping ancestors. A feature of settlements in the first stage was the scattering of small settlements that practiced reburial - a form of communal cemetery - to confirm their former tribal bonds.

The second stage occurred during the middle of Middle Yayoi. Techniques for cultivating rice in irrigated paddies and methods of managing large-scale settlements were introduced to the region from western Japan. The Nakazato site in Kanagawa Prefecture was a large-scale farming settlement that emerged during this period. It was formed suddenly in the middle of the plain more or less at the same time as settlements scattered around the edges of the plateau disappeared. Clusters were formed from a number of pit dwellings, with some arranged in a circle. There was a large building in the center of the settlement. This large building served as a place in which to worship ancestors. It follows, therefore, that small settlements scattered around the rim of the plateau during the first stage amalgamated to form the Nakazato site in order to carry out farming using irrigation. Thus, the formation of fully-fledged farming settlements in the Kanto region reached its second stage as a result of the part played by the introduction of techniques from western Japan more or less simultaneously with the amalgamation of small indigenous tribal groups.